

ToLOVEる 彼女達との奇妙な関係

ichizyo

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日々隣人からの襲撃を受ける高校一年生の少年は案外近くで、異星人を含む騒動に巻
き込まれてしまう。

隣人、友人、先輩、クラスメイト、そして異星人。

周りの人達に振り回され、いつの間にか物語に関わってしまった少年のドタバタラブ
コメディ(?)。

※この作品には、独自解釈が含まれています。苦手な方は注意してください。

目

次

プロローグ |
Startin g o f p roje c t s | 1

第一話 『本好きの殺し屋さん』

17

第二話

『闇』

|

第三話

『束の間』

|

第四話

『自覚』

|

第五話

『闇と光』

|

第六話

『多分偶然』

|

100

88

67

50

32

プロローグ

突然だが、平和という言葉を知っているだろうか。

調べてみると、一つは戦争や紛争がなく世の中が穏やかな状態にあること、もう一つは心配や揉め事がなく穏やかなこと、という意味がある。

一つ目は、国の法律で定められているので問題ないだろう。しかし、二つ目を考えた時、それは程度の違いはあれど、日常の中に確かに潜むものだ。心配といえば、誰か知り合いが病気になった時や家族と離れて暮らし始めた時、または進級してクラス替えになつた時など。揉め事といえば、人間誰しもが同じ考え方をしているわけではないので、些細なことでもぶつかり合つたり、口論になつたりと様々だ。

そうやつて考えてみると国としては平和だが、人間関係や置かれた状況によつて、平和とは言えない場面が多々存在している。

しかし、現在の状況や場面よりもさらに状況が悪化したり、急変したりした場合にはどうだろうか。そんな時こう思うかもしれない。『まだ前の方が平和だつた』、『今の状況になるくらいなら、前のままでいたかった』などなど。

それよりも悪い状態、危険な状態に陥ると以前の生活に戻りたいと思つてしまふこと

もある。

それは一人の少年、優稀にももちろん当てはまるものだ。

正反対姉妹の隣人、傍迷惑な従姉、少し変わった転入生、異星人、図書室にいる宇宙
一の殺し屋、買い物仲間の友人、やたら自分の部に勧誘してくる先輩、そして双子の転
入生。

個性豊かな人達に囲まれた生活の中で、彼の生活は一変することになる。

平和から、慌しく過酷な日常へと――

「ふああああああ……ねむい」

ゆっくりとベッドから起き上がり、まだ重たい瞼を薄つすらと開いて日を擦る。カ一
テン越しの外からは忌々しいまでの太陽がその存在を主張し、皮膚ガンの原因となる紫
外線を存分に発射している夏の今日この頃。今日も今日とて平和で安全な一日の始ま
りである。

たつた今、外の太陽に恨みがましく視線を送る彼の名前は葵^{あおい} 優稀^{ゆうき}。ピカピカの高校一年生で、放課後長く学校に居られるからと図書委員に志願した少年だ。総勢七名の志願者とジヤンケンという名の戦争を繰り広げ、それに見事勝利したのは記憶に新しい。実を言うと、今通っている高校の図書室は彼の唯一と言つて良いほどの憩いの場なのだ。理由は……まあ後々話すが、それはもう入学する三年くらい前から受験勉強期間終了まで。そんな図書室^{楽園}をそう簡単に手放すわけにはいかないと、全神経を右手に集中した結果が今の立ち位置である。

それに加えて――

「一人暮らしにも慣れてきた……かな」

優稀は現在高校一年にして自立している。正確には単身赴任中の両親から生活費を払つてもらつているわけなので、完全な自立というわけではない。まあ自炊などしていふため、自立（仮）くらいが妥当なところだ。

優稀は寝癖を直すために洗面所へと向かう。別に姉や妹はないので、何の気負いもなく扉を開き鏡の前に立つた。

「うわっ、寝癖すごい……」

そんなことを呟きながらも手慣れた様子でそれを直した優稀は顔も洗い、朝食を作るためにリビングに向かう。その最中何故か味噌汁のいい匂いがしたのが気になつたが、

昨夜はしつかり戸締りをして寝たので、きっと気のせいのはず。というか、戸締りしても入つてこられていたら、さすがにもう対処の仕様がない。だから大丈夫。そう自分に言い聞かせ、優稀はキツチンのあるリビングの扉を開き――。

「あら、おはよう優稀君。今日も暑いね、ホント嫌になっちゃう。あ、ご飯できるよー。早く椅子に座つてくださいね？」

そこには青紫色の髪の隣人悪魔が。

バタンツ！

と、壊れるほどの勢いで扉を閉めた。扉さんごめんなさい。

こうして、平和で安全という言葉とは程遠い、慌しく大変な優稀な一日が幕を開けたのだった。

* * * * *

「もー、ひどいなー優稀君は。朝からご飯まで作つて驚かせようとしたのに……」
両手でその端正な顔を覆つて、泣いたフリをする彼女の名前は西連寺 秋穂。

歳で、職業はファッショニエ雑誌の編集者である彼女は、突然部屋に入ってきて、ご飯作つたの何だのと言つてゐるが、なんだかんだで社会人だ。

「ひどいとかどの口が言うんですか社会人。まず常識を知つてくださいよ。不法侵入は立派な犯罪です。あとその泣き真似も詐欺師の手口ですから、やめてください。もう一度中学……いや小学校からやり直した方がいいんじゃないですか、バカ穂さん。それと聞き逃してないですかね。俺は貴方の夫ではありません」

「そんなに真顔で言わなくとも……」

全く優稀君はつれないなー、などと意味のわからぬことをのたまう彼女に舌打ちで返事をして、優稀は春菜の作った朝食に手をつけた。ちなみに春菜というのは、この非常識人西連寺秋穂の妹であるにも関わらず、常識人な西連寺春菜のことだ。お隣さんで、たまに夕飯などをお裾分けしてくれる優しい優しい一つ上の先輩。間違つてもこの非常識社会人と同じにしてはいけない。絶対にだ。

「……あの、優稀君。舌打ちは流石にひどすぎじゃない……？」

あとバカも

不満そうに優稀を見つめる秋穂は少しづつ椅子を近づけ、距離を縮めてくる。まあ優稀はその度に椅子を倍遠ざけているので、むしろ距離は離れて行つているのだが。

「あーすいません、バカはひどかったです。というか、何が『朝食できるよ』ですか。これ全部春菜さんが作つたものですよね？」

秋穂さん略してアホ

「ば、バレた……？　——つていうか、アホ!」

何やらガヤガヤ言っているが、優稀はすでに朝食を食べ終えているので制服に着替えるために自室に戻る。皿は……というか、並んでいる食べ物が全部タッパーに入つているんだから、秋穂が作ったものではないとこの部屋の住人である優稀にはわかつてしまうのだ。

「……それで？」

「それで、何？」

「いや、何で普通について来てるんですかね？」俺今から着替えるんですけど

制服に着替えるために戻るのに何故、秋穂がついて来るのか。というかいつも食べ終わつたんだろう。……つて、おいこら何でいきなり恥ずかしそうに顔を赤くする？

「それ……私の口から言わせるの？」

「言つてください」

「……まさかホントにわからない？」

「わかりませんよ。わかりたくもありません。わかつてたまるか」

「えー、そんなに全力で嫌がらなくとも……もう、照れ屋さんなんだからっ！」

「いや、照れてません。お願ひですから出て行つてくださいこの部屋というより、家から。そして二度どこの家に足を踏み入れないでください。『朝食ありがとうございま

す』とだけ春菜さんに伝えてもらえば……いややっぱいいです。自分で言いますか
ら」

バタンツと扉を閉め、鍵をかける。

ドンドンとノックではなく、ドアを殴打する音が聞こえるが、ドアには耐えてもらう
他ない。主に彼の尊厳のために。

「……朝から疲れた」

朝は忌々しく感じた日光すら励ましてくれているように感じてしまつている優稀は
すでに末期なのかもしれない。

あの後、優稀が普通に着替え部屋を出ると秋穂は何を血迷つたか、突然抱きついてき
たのだ。それを丁寧に引き離し、何事もなかつたかのように玄関に向かい靴を履いた
が、速攻で復活した彼女は今度は後ろから抱きついて来ようとしたので、上手く躲しだ
コピンをお見舞い。「あうっ」と声をあげた彼女に最初から気になっていた『どうやつて

部屋に入つたのか』について聞いたら、

『あ、そだつた！　優稀君、春菜にだけ合鍵渡したでしょ？　私がどれだけシヨツクだつたかわかる？　それがなんか気に食わなかつたから、春菜の部屋に忍び込んで、合鍵借りちやつた☆』

と、ご丁寧に最後にテヘツと言つて舌を出してくれたので、立派な窃盗罪ですと罪状を突きつけてやつた。そして、これが優稀が鍵を変えようと決意した瞬間でもある。「全く何がしたかつたのやら……あつ、あの人今日仕事なかつたのかな」なんとなく推理しながら、通学路をゆつたりと歩いていると。

「あ、優稀君おはよう」

後ろから声を掛けられた。

声に少し驚きながら、振り向いてみるとそこには黒髪の少女が走つてこつちに来ている姿が。

「おはようございます、春菜さん」

笑顔で優稀を見ている彼女は、朝の厄災の元凶でもある秋穂の妹の春菜だ。この姉妹は本当に正反対な性格をしているので、なかなか珍しいと優稀は思う。姉は時々意味がわからない行動を起こすが、明るい性格で、妹は少し引っ込み思案などころがあり、大人しめな性格だ。正直、優稀にとつて春菜だけが頼れる隣人である。

「ごめんね。朝からお姉ちゃんがそつちに行つてたでしょ？」

「はい、来てやがりましたよ。二丁寧に合鍵を持って」

皮肉を込めて優稀がそういうと春菜は少しだけ目を伏せ、

「うう……本当にごめんなさい。朝から合鍵がないのに気づいて……あれでも悪い人じやないの。だから、お姉ちゃんを許してあげて」

「別に春菜さんが謝る事じやないですよ。それに怒つてるわけでもありません。俺が単にあの人のこと苦手なだけですし……あ、そうだ。朝食ありがとうございました。美味しかつたです」

「…………優稀君の優しさが痛いよ、お姉ちゃん」

結構本気で涙目の春菜を宥めながら。優稀達は学校への道を歩く。もう慣れ親しんだ道を歩くのに迷うことは一切ない。実質もう三年とちょっとこの道を歩いているのだ。そんな優稀は高校一年だが、堂々とその道を歩く。

「なんである人はモテるんだろう」

「うん、すごく唐突だね。でも普通に綺麗だからじやないかな？」

「確かに綺麗ではあるんですけど……でもあれですよ？　朝から人の家に不法侵入したり、時には覗き魔だつたり、朝からベッドに潜り込んでしたり、鍵かけてたはずなのに起きたら膝枕されてたり……はあ」

「そ、そんな重苦しいため息、朝から聞きたくなかったよ……でも私のお姉ちゃんってそんなことしてたんだ……ごめんね」

実の妹に謝らせる姉とはこれいかに。優稀はとりあえず、

「だから、春菜さんは悪くないですって。全てはあの常識外れなアホ……違った。秋穂さんが悪いんですよ」

「今さらつと、お姉ちゃんのことアホ呼ばわりしたよね」

普段はそんな行動なんてしないくらい大人なのにな、と本気で考え始める春菜。優稀はそんな彼女に「ただからかってるだけだと思いますけど」とあまり深く考えないよう促し、とりあえずこの話題から別の話題に変えることにした。

「まあそれは良いとして。そういうえば、春菜さん。例の好きな人とはどうなつたんですか？」

直後、春菜が盛大に吹き出した。どうやら別の話題のチョイスが悪かつたらしい。

そんな吹き出すほど衝撃的な質問だったのか。優稀は心の中で少し反省する。しかし、ここまで反応が大きいとなると何か進展か、または後退かのどちらかがあつたのかかもしれない。

「ど、どうつて……？」

「いやだからどこまでいった、とか……告白した、とかですよ」

うーん、と。

そう聞くと春菜は顔を真っ赤にし、小さく唸り声をあげた。この反応だとおそらく、『小さなことは結構あったが、決定的なことはなかつた』的な感じかな、と優稀は勝手に予想を立てる。

「……ララさんのおかげで普通に話せるようにはなつた、かな。それでもやつぱり顔を合わせると恥ずかしいけど」

「そうなんですか……。俺はそういう経験がないから、詳しくはわからないけど、話せるようになつたのは良かつたじやないです。俺は春菜さんらしくて良いと思いますよ。その代わりまだまだ先が長そただけど」

「うう……」とまたしても涙目になる春菜に癒されながら、先ほどの彼女の発言で気になつた点が一つ。

「それと確かにその『ララさん』っていう人が宇宙人なんでしたつけ？」

「そうだよ。デビルーク星のお姫様でね、すごく明るくて優しい友達なの。優稀君は見たことない？」

「いや、流石にあれだけ目立つ容姿なので、何度かはありますよ」

ララ——フルネームはララ・サタリン・デビルーグ。春菜が一年生の時の転入生で、明るく活発な印象を与える少女だ。しかし、その正体は外国人などという安易なものでは

なく、広大な宇宙にある惑星の一つ、デビルーク星からやつて來た異星人。さらには他にも宇宙人が今二人が向かつている彩南高校にいるのだから、彩南高校の生徒達は適応能力に異常なまでの適性を持つてていると言つても過言ではない。

春菜は笑顔で彼女の特徴であるピンク色の髪、緑色の瞳、そして悪魔のような尻尾などを挙げていく。それも全て褒めながら。しかしその紫の瞳は嬉しそうに輝いており、何だか優稀にはとても眩しく感じられた。

「あとララさんには、二人の妹がいるの」

「へえ、そなんですか」

まあでも別に関わる機会はなさそうだ、と優稀は春菜の言葉に素つ気なく返答する。しかしそれがいけなかつた。視線を感じ隣を見てみると不満に感じたのか、少しムツとした表情を浮かべた春菜が視界に入つた。それを見た優稀がとつた行動は、

「も、もう学校着きますね。——あ、そういえば俺今日日直だつた。すいません春菜さん、お先に！」

戦略的撤退だ。

言い終わる前に走り出したので最後まで伝わつたかは定かではないが、優稀の今日日直という発言は実は嘘ではない。嘘ではないのだが、朝からの仕事といえば、学級日誌を職員室から持つてくるだけしかないので、別に急ぐ必要もない。つまり簡単に言う

と、優稀は春菜の視線に耐えられず戦略的撤退という名の逃亡を図った、ということだ。

「あ、優稀君——つて、もう背中見えないし……」

優稀は足が速い。

よつて撤退を選択した。靴箱に入り靴を上履きに履き替え、職員室へ走る。階段に差し掛けたところで、茶髪の少年が厳しそうな黒髪の少女のスカートの中に顔を突っ込んでいるのが横目で確認できたが、厄介事は勘弁なので、見なかつたことにした。その際、階段の中盤くらいで止まつてその光景を眺めていたピンク髪の少女がおそらく春菜の言つていた『ララさん』なのだろうと優稀は確信を持つて予想し、再び職員室へ走り出す。

「あ、別に走る必要なかつた……」

春菜から逃げることを考えていたためか、そんなに急ぐ必要がないことを忘れていたらしい。優稀はその場で一度止まり、今度はゆっくり歩き出す。まずは職員室へ。それから教室へ。

この時、優稀は知る由もなかつた。

まさか、こんな日々が優稀にとつて平和であつたとは。そしてこれからが本当の混沌の始まりだつたとは。

彼は全く考えていなかつたのだつた。

学級日誌を職員室で回収し、ゆっくりめに自分のクラスに入つた優稀が感じたのは、少し浮かれたクラスメイト達の姿だつた。事情を聞こうとも思ったが、扉を閉めた途端に朝礼開始前五分のチャイムが鳴つたので、敢え無く自分の席に座ることにする。その際、隣の赤髪おさげに挨拶をし、返ってきたのを確認して前を向いた。

しかし、何故クラスメイト達がそんな風に浮かれていたのか、優稀は直後に知ることになる。

「……は？」

もうすでに見慣れた担任教師を先頭に3人が教室に入つてきた。いつもは担任だけなので、必然的に転入生か教育実習生ということになる。しかしこの場合には明らかに後者ではなかつた。

何故か。それは担任に続いて入つてきた二人の特徴にある。ピンク色の髪に紫色の瞳。それに加えて、後ろに見える悪魔のような尻尾。片方はツインテールで、もう片方

は肩にかかるかどうかくらいのショートヘア。髪型は聞いてなかつたが、まさにその特徴は優稀が朝から春菜に聞いて、『関わることはない』と判断したララの妹達のもので。だから優稀が素つ頓狂な声をあげて、まるで『鳩が豆鉄砲を食つたよう』という言葉を表現したかのような表情で固まつてしまつても、それは普通の反応で、何らおかしくはなかつた。

「ナナ・アスター・デビルーグだ」

「モモ・ベリア・デビルーグです」

「よろしくな！」

「よろしくお願ひします」

担任からの紹介、そして彼女達自身からの自己紹介が終わる。目の前の現状を見ながら、朝から春菜さんが言つていたララさんの妹とは彼女達のことか、と優稀は冷静に考察していた。特徴的なピンク色の髪に、瞳の色は違うが尻尾があるので、ほぼとというか間違いはないはずだ。……なんて言つてる場合じゃない。どうして転入してきたのか。どうしてこのクラスなのか。優稀は迫いつかない思考にうんざりしながら、とうとう考えるのをやめた。やや逃避気味に窓の外の空を見る。その際隣の席の赤髪おさげが目に入ったが、彼女は我関せずというより、元から何も聞いていないような感じだったので、少しだけ羨ましく思つた。

さて、もう一度この状況を見てみよう。

異星人なピンク髪の双子が、他人からクラスメイトにジョブチェンジしました。

……どうしてこうなった。いやホントに。

Starting of projects

第一話 『本好きの殺し屋さん』

「よろしくな！」

隣でよく言えばフレンドリーに、悪く言えば礼儀知らずに挨拶をする双子の姉を見たから、デビルーク星第三王女、モモ・ベリア・デビルーグは愛想よく、そして礼儀正しくお辞儀をした。

「よろしくお願ひします」

何事も第一印象は大切だ。

モモは、頭をあげるとすぐに明るく華やかな笑顔を浮かべる。

……学校で動きにくくなつてしまつたら、『ハーレム計画』を円滑に進めることができなくなるもの。

せつかクリトさんの人間関係について知れる良い機会なんだから、そう最後に頭の中で付け足して、モモはこれからクラスメイトになる教室内の生徒達を見る。そこでようやく男子達の視線が自分に張り付いているのに気づいた。追い討ちのようにもう一度笑うとつられるように、頬を染めるクラスメイトの男子達。その眼浮かんでいるのは、

自分の慕うリトのように優しげな感情——などではなく、その頭にあるだろう下心だけ。

……男の人って皆こうなかしら。

モモはひつそりとため息を吐きそうになり、どうにかそれを飲み込んだ。ここで目をつけられて動けなくなってしまつては本末転倒。それだけは避けなければ、と彼女は再びその整つた顔に笑顔の仮面を付け直した。それが逆に動きにくくなる結果になつてしまふということには、気づかないままに。

「えーと、席は……」

担任教師に促され、自分の席を探す。

その途中、窓際の席に目を向けた時。シンクロするような動きで頬杖をつき、そして窓の外を向いた赤髪の少女と黒髪の少年の姿に思わず笑いそうになつたが、何とか堪えて自分の席に向かつた。そこでまたしてもジロジロと。早くも疲れてきたが、どうにか席に座り、未だ続く視線の雨に向かつて笑顔を向けるモモ。それに呼応するようになー！」と両手を挙げて、喜びを露わにする彼女の席付近の男子達。担任の「静かになさい」という声で、彼らはようやく静かになり、ようやく朝礼が開始された。連絡事項を伝える担任教師の声が響く。
 （このクラスの男子の中で上手く関われそなのは、あの人だけみたいね……）

モモの視線は、先ほど隣の席の少女と見事なシンクロを見せた黒髪の少年の方へ。少なくともモモの目には、このクラスの中で下心を含んだ視線を向けてこないのは彼だけのように映つたからだ。

学校の状況を知るには、第三者の意見も必要になつてくる。まあ学校の状況と言つても、彼女の場合はリトやその周りの少女達についてだが。しかし、そんな第三者の意見を聞けば、わかることがあるかもしれない。これはモモが、ナナとともに転入を決めてからずつと考えていたことだった。三年生だと極端に関わる機会が減つてしまふ。確かにこの彩南高校の状況を一番よく知つているのは彼らだが、逆に下級生と多く関わつてもいる。何かしらの偏見があつて、上手く情報が入つてこないかもしれない。それに教室も離れているので、一年生……それも転入生が関わるには、些か難易度が高くなつてくる。それでは、二年生ではダメなのか。答えは、これも却下だ。あからさますぎる行動は、変な警戒心を抱かれてしまう。二年生はリトの学年ということもあつて『ハーレム計画』の候補者が多いのだ。下手に動き回つてしまつては、誰かに怪しまれてしまふかもしれない。それにリトにバレてしまえば、今まで築いてきた信頼に亀裂が入る可能性もある。そんなことは彼女自身が耐えられない。

ならば、と。

彼女が至つた結論は『クラスメイトの男子にきく』だつた。ここでどうして男子なの

かといわれると、女子だと部活や委員会でもない限り二年生の男子と関わることはないと考えたから。男子ならば、同性ということもあって話もしやすく、関わりやすくもある。それに、時期的にも新入生と二年生が何かしらで関わっていてもおかしくはない。運良く関わりをもつていれば良し。関わりをもつていなくても自分がリトと引き合わせて、友人関係にしてしまえばいい。異性には話せなくとも、同性になら話せることもある。さらに言えば、現在リトの周囲には女性ばかりがいるので、男性目線の意見がいかに貴重なものかわかると思う。そんな考えの元での彼女の結論がそれだつた。

まずは愛想良く話しかけて好印象を与えるところから……！

内心で拳を握り、気合いを入れる。

こういう時、ナナの性格は羨ましいとモモは思う。あんな風に踏み込んで、しかもフレンドリーに接することができる的是彼女の長所でもあるからだ。しかし、頑張らないと。それもこれもリトの『ハーレム計画』を成功させるため。それでもし、自分も愛してもらえるなら――。

それから朝礼が終わるまで、モモの視線はずつとその少年に向かっていた。友達兼計画の協力者となるであろうその少年に。しかし、何事も思い通りに行くはずがない。

それから休み時間ごとにモモはクラスメイトからの質問攻めにあい、とうとう一言も目的の少年と言葉を交わさないまま、午前中が終わってしまった。

日が高く昇る正午すぎ。

朝よりもその猛威を増した日光が、再び人肌を焼かんとするその時間は、学校で言うところの昼休みの時間だ。購買にパンを買いに行く人、友達同士で弁当を食べる人達、委員会の仕事に勤しむ人など人それぞれに過ごす長めの休み時間。

朝から色々ありすぎて、まだ後半分授業が残っているのにすでに疲労困憊である葵優稀もその例外ではなかつた。

「わざわざ職員室に呼び出して、転入生の面倒を見るように言うとか……意味がわからぬ」

重苦しく、今朝も吐いたようなため息を吐く彼は自分で用意した昼食を食べた後、職員室に呼び出された。言われた内容は転入生——ナナ・アスター・デビルークとモモ・ベリア・デビルークの学校生活の手助けをすること。どうして学級委員じゃないのかと聞いたが、『葵君が一番しつかりしてるからよ』と涙ながらに言われてしまつたので、断り

ようがなかつた。……大丈夫か、一年B組。
「全く迷惑な話だな……」

優稀は不満そうにそう呟いた。

彼は朝礼で転入生がデビルーグ星の王女だと知った時、関わらなければ問題ないか、と完全に楽観視してしまっていたのだ。同じクラスにはなつたが、関わりさえしなければ面倒なことにはならないと。しかし、昼休みに担任教師直々のこの指令である。もう完全に優稀は教室へ帰るのが嫌になつてしまつて、もうこのまま、下校してしまうかと思うほどに。

「あ、でも今日秋穂さん休みだつた……」

詰んだ、と。

秋穂がいるので帰りたくないと言つているかのように、ガツクリと首を垂れる優稀。まあ、実際そのものではあるが。

考えてみれば、今朝はいつもより比較的楽だつた氣がする、と優稀は今朝の出来事を思い出した。

突然の秋穂の侵入、春菜との登校、そして転入生の登場。言葉にして見るとそうでもないが、実際に起こるとそれはもう疲れてしまう。特に最後のは、優稀が思わず思考をやめてしまふほどに予想外だった。朝が楽だつたのには、こんな意味があつたのかと優

稀はいるとも知れない神様に抗議するように、青く澄んだ空を睨みつける。そしてさうに優稀を悩ませる原因となつてゐるのは、朝礼中の――。

「何であんなに見られてたんだ……？」

優稀はふと気になつていていたことを思い出す。

それは双子の妹の方、モモ・ベリア・デビルークの突き刺さるような視線に晒されたこと。それが何故か優稀にはまるで心当たりがなかつた。自分の知らないうちに何かしてしまつたのか、とも考えたが、そもそも彼女とは面識がない。朝、春菜にララの妹と聞いたのが、初めてその存在を知つたきっかけだつたはずだ。

うーん、と首を傾げて考えるがまるでわからない。

「これはもう、あっちから何かしてくるのを待つしかないよな――……」

まだ何もされていない。何をしようとしているかもわからない。そんな状態で対処しようとするなんて酷なものだ。優稀はこのを考えるのはもう終わり、というよう

に一つ手を叩き――

「――あ」

視線の先に、風に揺れる見覚えのある金髪を見つけた。……と同時に目が合つた。ジーッと。それはもう穴が開くほどに優稀のことを見ている。

木の影で涼しそうなベンチの上。本を片手に、たい焼きをもう片手に。彼女は何故か

その本を読むのを止め、優稀のことを見ていた。

「こ、これはスルーしたらダメなやつ……。」

それは経験則による話。優稀は無意識のうちに、流していた冷や汗を制服の袖で拭い、しつかりとその鋭い視線と対峙する。

綺麗で可憐なその紅色の瞳が彼を射抜いている以上、『無視する』という選択肢はあつても、それを選ぶことはできない。

「……」

「……」

しかし、何の因果か。この時彼を襲つたのは、妙な悪戯心と好奇心。人間誰しも試して見たくなることはある。

よつて、今回優稀が強烈な視線を感じながらも、彼女の座るベンチの前を無言で通り過ぎるというチャレンジをしても何らおかしくはない……はずだつた。

「……あの」

「……」

「……」

「……」

ビュオツ——と金色が宙を舞う。

それはおよそ人間の髪が出るとは思えないほどに風を切るような音が発しながら優稀の背後に迫り、その後には彼の身体が金色に巻かれていた。そしてそのまま、優稀は空中へと投げ出された。……いやもの凄い速度で引き寄せられた、が正しいか。

「……」

「ごめんなさい、出来心だつたんです。だから、無言で睨みつけるのやめてくださいお願ひします」

熱く厳しい陽の下から、涼しく心地よい木陰へと。引き寄せられた優稀は彼女の隣に座らされると同時に、流れるようく謝罪と要望を述べる。

そんな彼の隣には今日も面白いまでの無表情、金色の闇こと金髪少女——ヤミが少し、ほんの少しうつとした表情でたい焼きを頬張っていた。

* * * * *

蝉が鳴く。陽射しが射抜く。肌が焼ける。そして、隣の少女は本を読む——。……うん、何だこの状況。

「あの金色さん、俺はいつまでここにいればいいんでしようか?」

「……私がこの本を読み終えるまでです」

ヤミはごく当然のことのように、本から目を逸らさずにそう答える。いつもこうだ。優稀がヤミと会うと隣に座られ、彼女が本を読み終えるまでそこにいることになる。実はこの関係、もう約一年ほど続いているのだ。優稀が気づいた時にはすでに、ヤミと視線が合うと横に座られるという暗黙の了解が出来上がつてしまっていた。しかし、だからと言つてただ座らされているわけではない。そこにはちゃんとした役割があり、目的がある。

「ユウキ、これは何と読むのですか?」

読んでいる本を、その部分に指をさしながら優稀に見せるヤミ。どうやら今回は小説らしい。

役割とは、すなわち優稀がヤミのわからない漢字の読みや意味を教えることだ。

「うん? どれどれ……これは『蠶貝』だな。意味は確か、『自分の気に入つた人やものに、特に力を貸したり助けたりすること』……だつたか」

「……ひいき、ですか。ありがとうございます」

ヤミの視線は再び手元の小説へ。

優稀はそんな彼女を見ながら、これも『蠶貝』になるのかな、と少し笑つた。目的と

はすなわちヤミが本を読むに当たつて、わからないことや漢字の読み、意味などを知ること。

基本的にはその行為について、優稀に利益はないのだが、どんどん覚えていくヤミに漢字などを教えることを案外楽しんでいる節があるのも事実ではある。

「……良ければ、どうぞ」

差し出されたのは、買つてからあまり経っていないのか、未だ温かそうなたい焼きだ。「お、ありがとうございます。——いきます」

ヤミはいつも通りの無表情のまま、たい焼きを頬張る優稀を見つめる。まるで、『どうですか?』と感想を期待するかのように。

「甘くて美味しい。俺、たい焼きってあんまり食べたことないんだけど、かなり美味しいな」今度俺も買いに行こう、と付け足して温かいたい焼きをもう一口。口内に広がる餡子の風味に頬を緩めながら、優稀はもう一度ヤミに「ありがとう」とお礼を言つた。

「……そう、ですか」

そう言つて、無表情のまま本を読み始めるヤミ。

金髪がピヨコピヨコと若干跳ねているように見えるのは、気のせいだろうか。優稀はそんなヤミを見て、

「本当にたい焼き好きだよな」

笑顔でそう言つた。

実際優稀は何度もヤミがたい焼きを食べている場面に遭遇している。というか、ほとんど毎回のようにたい焼きを頬張つてゐる。初めて会つた時は食べていなかつたが、あの時は買えなかつたんだろうか。と優稀は今更のように思い出して、少し苦笑い。

「……いけませんか？」

「いや、いけないなんてことはないよ。ただいつも食べてるから、言つてみただけ

「……ですか」

いつもの如く素っ気なく返つてくる。しかし、一度本に集中しだすと、呼んでも返事をしないのがヤミだ。つまり、今はまだ本の続きを読み始めていないことになる。

「普通の『飯も美味しいけどな』

「……」

「……あ、続きを読む始めた」

無言になつたところで、優稀はベンチから立ち上がり、背筋を伸ばした。……いや、そんな髪をまとめなくとも、いなくなつたりしませんよ？

優稀が微妙な顔でそんなことを思つてゐると、まるでその心の声が聞こえたかのよう

に、彼女は髪を元のストレート戻す。そして再び視線は本へ。

ここからはもう読めない漢字か、意味がわからない漢字が出てくるまで、無言の時間

が続くので、優稀も呼ばれるまでベンチの背もたれに体重を預け、青く澄んだ空を見上げた。

静かな一陣の風が黒と金を揺らし、草木を撫でながら、まつたりと吹き抜ける——

「——なあ、金色さん」

ふと。

返事があるはずがないが、優稀はヤミに声をかける。空を見ているため、ヤミからは彼の表情は見えない。しかし、声のトーンはやけに真剣みを帯びていた。

「……何ですか」

しかし、優稀の予想とは逆に応答する声が。

キリの良いところまで読んだのかどうかはわからないが、ヤミは少し間を開けた後に本を閉じて優稀の方を向いた。彼女にしては珍しく、本より彼の話を優先してくれるらしい。

「あれ？　今日は聞いてくれるんだな」

「…………丁度良いところだつたので」

間がいつもより長かった気もするが、気にせず優稀は質問する。別に今聞かなくてはならない事ではないが、もう随分前——会った時からずっと気になっていた事を。その内容は——

「金色さんはさ……本当に殺し屋なのか？」

殺し屋。宇宙一の、伝説の殺し屋——金色の闇。

優稀はすつと疑問に思っていた。出会って数日後に知った真実。——彼女が殺し屋であることについて。たつた今まで吹いていた風が、それがまるで当然のように止まつた気がした——。

「……はい、そうですよ。何ですか、疑っているんですか？」

「……まあな。だつて今の金色さん、人を殺すような雰囲気ないし」

誰が思うだろう。

学校で、生徒ではないが本を読む少女を、たい焼きが大好きな少女を、人にお礼を言うことができる少女を。伝説の殺し屋だなんて——。

「……」

「確かに無表情だけど、感情がないわけじゃないし」

少しの変化だが、笑うことも怒ることも、寂しそうな表情をすることもあると優稀は知っている。この一年で何度も見ている。少し乏しくはあるが普通の人のように、感情を表に出すことのできる彼女は殺戮人形などではなく、普通の人間とまるで変わりはなかつた。

暫し沈黙の時間が流れ——瞬間。

ヒュン——

何かが風を切るような音が聞こえ、目だけを下に向けてみると、髪とは思えないほどに鋭く尖つたそれがナイフの形となつて、優稀の首元に突きつけられていた。

「では、あなたを今ここで殺しましようか？」

驚くまでの無表情、冷徹なまでに優稀を見据える冷たい眼、そして、抑揚のない声。そこには本とたい焼き好きのヤミの姿はなく、伝説の殺し屋とまで言われるようになつた、殺し屋としての顔を浮かべた『金色の闇』が佇んでいた。

第二話 『闇』

——あなたを殺しましようか？

その言葉と同時に空気が変わった。……気がした。

別に空気の温度とか湿度とかが変わったわけではない。……そのはずなのにたつた

今感じる空気は酷く冷たく——重かつた。

……これ、は——

感じられるのは言い知れぬ不安感と焦燥感。さらには、見つめてくる無感情な紅色の瞳に宿るどこかドロつとした禍々しい雰囲気、突きつけられた刃の先から感じられる恐怖。

知っている。

この様々な負の感情を表に引き出してくるような、その感覚を優稀は確かに知っている。……その正体が俗に言う『殺氣』だということを——。

今にも逃げ出したくなるような威圧感があるのに、なぜかそこから指一本たりとも動かせない。手や背中は汗でしつとりと湿つて、シャツが肌に張り付く。

そんな謎の感覚に優稀が押しつぶされそうになる直前——フツ、と。全身から力が抜

けるほどに空気が軽くなつた。

「嘘ですよ」

まるで何事もなかつたかのように。いつもの無表情で。

再び彼女は本に目を向ける。

——正直、怖かつた。

先程までとは比べ物にならないくらい柔らかな、いつも通りの空気に優稀は呆気に取られる。

突然変わつた空気もそうだが、普段通りの態度から先程の行動。その切り替えを即座にやつてのける彼女に、優稀が不安と恐怖を抱いたのは紛れもない事実だ。

ヤミは『普通』じやない。この普通とは、いわゆる通常の地球人ということ。通常の人間が、先程のヤミを目の当たりにして恐怖しないわけがない。もちろん、特殊な訓練受けた者や環境で育つたものならば別だが。

(でも、"あの人"に比べれば——)

「ユウキ、これは何と読むのですか？」

その声でふと我に戻る。

隣で、本の一部を指差しながら聞いてくる、彼女の目は無表情で。何事もなかつたかのようにいつも通りに。そんな彼女からしたらやはり先程の変貌は日常茶飯事なのだ

ろう。きっとそうだ。何せ、似たような人物を優稀は知っている。だから、優稀もいつも通りに。そして、少しのわがままも添えて。

「これは『既視感』^{きしかん}って言って、意味は『一度も見たことがないのに、すでにどこかで見たことがあるように感じられること』だつたかな。……あ、たい焼きもう一個食べて良い？」

自分から質問して来たのに、一瞬ハツとしたような表情をして小さく「……どうぞ」と言う彼女にユウキはクスッと笑い、たい焼きを手に取った。

——そこに居合わせたのは、本当に偶然だつた。

昼休みになり、適当に言い訳をつけてクラスメイトからの質問の嵐を潜り抜け、渡り廊下を『ある人』を求めて歩いていたモモ・ベリア・デビルーク。クラスメイトの下心ありありな質問攻めにうんざりして、愚痴をこぼしていく彼女の目に止まつたのは、結構リトを暗殺^{ターゲット}対象と呼び、その命を狙つてこの彩南町に来た金色の殺し屋と、今自分が

目的としている人物、『ある人』こと——葵 優稀が一緒に昼休みを過ごしている光景だつた。これはどういうことだろう、とモモが一部始終を観察していた結果、もつた感想は。

な、何なのあのただならない雰囲気は……！

本を読んでいたり、たい焼きを一緒に食べていたり……までは普通だつた。まだ少し関わりがあるのかな、くらいだつた。しかしそこから、彼女が”**変身**^{トランジ}”能力により変化させた刃を少年に突き付けたり、それを解いた後、何事もなかつたかのように親しそうに会話していたり。それに対し、満更でもない様子のヤミ。だから——

ま、まさかあの二人つて、そういう関係なの……？

モモがそんな風に勘違いをして、おかしくはない。しかし、そうなつてくるとモモとしては、面白くない。彼女はヤミも『ハーレム計画』の候補に入っていたのだ。そんな彼女からしてみれば、すでにそんな関係になつていれば非常に都合が悪い。

よつて彼女は作戦を変えることにした。

ヤミさんとあの人と一緒にいる時間が減れば、きつとその間にリトさんが頑張つてくれるはず……！

あのリトさんの神業もあることだし、と頭の中で付け足して、モモはたつた今脳内で形成した謎計画を実行に移す。

まずは第一段階……あの人と仲良くなるところから!

自分が仲良くなり一緒に行動すれば、ヤミとの遭遇率を大幅に減少させることができ
る。その思考の元、モモはできるだけ愛想良く接することに決めた。

葵優稀の性格や素性は大体、クラスメイトの方々から情報を収集済み。『基本的に話
しかければ、普通に返事をしてくれる』、『優しくて温厚だけど、休み時間と昼休みは全
然教室にいない』などなど。意外と情報が多いことにモモは少しだけ驚き、そしてあり
がたいと思つた。……よし！

「ヤーミさんっ」

ゆっくりと落ち着いて、比較的親しみやすい笑顔でモモは金色の殺し屋——金色の闇
こと、ヤミに声をかけた。

「……」

「…………あれ？　あのー、ヤミさん」

おかしい。返事がない。

どうしてか、とヤミを観察してみると、彼女はたい焼き片手に本を読んでいる。その
顔はいつもの無表情で、しかし本に集中しているのか、その視線は文章に固定され、そ
の他をまるで映してはいなかつた。

「……」

「おーい、ヤミセーン……たい焼き勝手に食べちゃいますよー」

「……」

「あ、あんな所にリトさんが！」

「……」

「あ、あのヤミさん？」

そろそろ返事してくれてもいいかなー、なんて……

「これもダメ。

その後、何度か試したがどれもこれもダメ。完全無視な彼女の対応に、モモが若干涙目になりかけた時――

「なあ、モモ・ベリア・デビルーフさん」

救いの手が伸ばされた。

パアと音が出てそうなほどモモは表情を明るくし、まるで神様が舞い降りたかのよう
な、そんな嬉しさを含む笑顔を優稀に向けた。それは間違いなく、仮面を被つた表情で
はなく、仮面などついていない素の表情で、自分でも気づかないままモモは他人にそれ
を晒していた。……どれだけ救いが欲しかったのか。

「もう少しで読み終わるだろうから、待つてあげてくれない？」

「……えっと、ですがもう少しで昼休み終わっちゃいますよ？」

お願ひ、と頭を下げる優稀に「わかりました……」と言つて、モモはとりあえず待つ

ことにした。

でも、これはチャンスかもしないわ……ヤミさんは話を聞いてないみたいだし、今なら彼と仲良くなれるかもしれない！

今がチャンス。

逆にヤミが聞いていない今がチャンスなのでは、と考えたモモは早速行動に移る、「初めまして、私はモモ・ベリア・デビルークです。これからよろしくお願ひしますね？」

精一杯の愛想笑いと若干の猫なで声とともにモモは優稀の懐に入ろうと、まずは自己紹介。これで好印象ならば、このまま行くだけで仲良くできるはず。しかしモモのそんな考えは次の一言で、打ち砕かれることになる。

「初めまして、葵 優稀です。ただ、ごめんけど、あまりよろしくはしたくないかな」

「……へ？」

思わず間抜けな声が出た。

しかしすぐに我に帰り、いけないいけない、とモモははしたない今の返事を取り繕うように咳払いを一つ。まずは理由を聞かなくては。

「……理由を聞いても？」

「理由というか……まあ、そもそも進んで関わる気は無かつたし。それに俺、猫撫で声と

か好きじゃないし』

主に隣人のせいだけど、と付け足す優稀の声はすでにモモの耳には入つていなかつた。

な、なんのこの人、偉そうに……！　何が『進んで関わる気は無かつた』よ！

私だつて、リトさんのためじゃなければ、こんな……

先程までクラスメイト達からの質問攻めにあつていたストレスがここに来て一気に押し寄せてくる。予想以上に彼女はうちに溜め込んでいたらしい。

「だから、あんまり仲良くはしたくないな。クラスメイトとしてはよろしく」

よろしくと言いながらも彼は握手する手を出そとはしない。

優稀は日頃の秋穂に似たものをモモに感じていた。そして、そんな秋穂への対応を朝からしてきたのだ。それで疲れている所にモモの登場。一目見た瞬間、彼はモモが秋穂にどこか似ていると感じてしまつた。だから、優稀がこんな態度になつてしまつても誰も文句を言うことはできない。しかし……しかし、だ。そんなことなどモモは知らないし、モモには関係ない。だから――

「何ですか、あなた。人が折角仲良くしてほしいとお願いしているのにその態度は。もう少し礼儀というものを知つたらどうなんですか？」

ここでモモがつい言い返してしまつても、これにも誰も文句は言えないのだ。それに

悪い状況も重なつていて。優稀の方は朝からの秋穂への対応。モモの方は下心丸出しなクラスメイト達への対応。しかも優稀は少し毒舌でもある。それがさらに拍車をかけてしまつた。

そして、そこまで言われて言い返さない優稀ではない。

「猫被りに礼儀がどうのとか言われたくないな。それに別に俺が誰と仲良くしようがアンタには関係ないだろ……自分の都合押し付けんなよ、腹黒王女」

「――っ！　腹黒王女ですって……！　私はリトさんのために――っ……と、とにかく！」

「あなたには私と友好的な関係を築いてもらいますからねっ！！」「はあ……？」

「それはどう考へても横暴だろ。自分の言つてること理解してる？」

ああ言ええばこう言う。

まさにその言葉が合うように、二人は口論を激化する。モモは嫌悪感丸出しの表情で、優稀は冷静な表情で。

「あなたこそ、その足りない脳みそで考えたらどうなんですか？　どれだけ私と仲良くなつた方が利益があるか。あ、所詮は地球人。思考力から身体能力まで私達デビル－ク星人にはまるで歯が立ちませんものね？」

「それは地球人全員に喧嘩売つてると言われても文句言えないからな……？」

それに友達になるのに利益を考えるとか……アンタ、友達いないだろ」

「——友達くらいいますよっ!!　たくさん、あなたの考え方られないくらい！　たくさんね！」

「へえ……それは是非会つてみたいな。そのた・く・さ・ん・の友達様方に」
ニヤニヤと悪戯つ子のように笑う優稀にぐぬぬ、と言いながらモモはすでに悟つてい
た。この人ともう友好的な関係は築けないだろう、と。ここまで言わわれては、流石にも
う言い返すしかないし、いくらモモでもここまでくれば、何か特別なきつかけがない限
り、関係修復は不可能。

しかし、『ハーレム計画』を円滑に進めるためには、自分以外にもう一人協力者がいた
方が確実だ。そこまでしてまで、必要なのかとも思うが、モモには確実性が欲しいのだ。
自分も愛されるために――

「……あの、そろそろ昼休みも終わりですよ。ユウキ、プリンセス・モモ」

そんな雰囲気を破つたのは、本を閉じて正論を言つたヤミだった。彼女は若干、怪訝
そうに目を細めモモを見つめる。

「あなたが声を荒げる所なんて初めて見ましたよ、プリンセス・モモ。裏で色々考えてい
ても、所詮はまだまだ子供ですね」

「……あの、ヤミさん？　私は子供ではありませんよ？」

「いや十分子供だろ」

「何処がですか!？」

わざわざ、胸もちゃんとありますよ、と付け足して、両手で胸を寄せるモモは完全に
我を忘れてしまっている。普段からナナに『はしたない行動は慎みなさい』と言つてい
るが、今は本当にそれが彼女に言えるのか、不思議なところだ。

バチバチッ、と。

視線を交差させるモモと優稀にヤミは自分の知らない二人を見て、やや驚きを含んだ
表情で、たい焼きの最後の一欠片をその小さな口に頬張った。そこへ――

「モモ！」

「リトさん？」

狐色のツンツンヘアーを風に靡かせながら走つてきたのは、モモの『ハーレム計画』の
中心人物にして、ヤミ曰く『えっちい人』、彩南高校二年の結城リト。彼は何処か焦つた
様子で、後ろを振り返りながら、モモの横で足を止める。

「どうかなされたんですか？」

「あ、あいつらが……！」

そんなリトの言葉足らずの説明に困惑しながらも、モモは彼の指差す方向へと視線を
移す。同じくその場にいた優稀とヤミも同様に。そこにいたのは。

「見つけたぞ……金色の闇」

「何ですか、あなた達！」

「猿山達、さつきまでは普通に話してたのに……」

彩南高校の制服を着た七人の男子生徒達だつた。

しかし、普通ではない。——涎を垂らし、白目をむいたその姿は明らかに異常だ。

狙いは……ヤミさん？

モモはいつもの如く頭の中で考えを巡らし、咄嗟にリトの前に彼を守るように立つた。同じようにヤミも優稀の一歩前へ。

「オレ達と……遊ぼうぜえ!!」

* * * * *

襲撃者の中の一人が声と同時に右手伸ばしながら、ヤミに向かつて突貫する。両手を合わせ、上から下へ。そんな単調な攻撃をヤミは空中に飛び上がることで回避。脇に優稀を抱えながらも、彼女が空中で体勢を崩すことはない。

——速い……！

凄まじい音を立てて真っ二つになるベンチを見ながら、ヤミはそれを破壊した張本人に視線を向ける。明らかに人間ではありえない力。それに白目をむいて涎を垂らした顔。どう考へても――

「何者かに操られているようですね……」「おい、金色さん！」

着地した直後に目の前に迫る手を優稀の声がすると同時に回避し、その先で後ろから襲ってきた一人もまた回避する。危なげなく回避しているようだが、実際にはヤミもギリギリだった。

……いや、私が鈍っているのか――

「――つ!?

「捕まえタア!」

そしてどうどう左手を取られ――ヤミは巻き込まないよう優稀を少し強めに投げ飛ばす。直後、そんな彼女の心情など露知らず、残りの男子達が集まってきて、ヤミの腕や足を拘束した。

「金色さん!?

「ヤミ! 今助けるからな!」

リトが威勢良く声を上げるが……

「つ！」

今ヤミは拘束されている。それも足や手を広げられた状態で。つまりリトからは、拘束されたヤミのむき出しになつた胸や太腿、そして清純な白色の

「——つ！ 見ないでくださいッ！」

「う、うわあああああ!?」

「り、リトさん……！」

リトが金色に巻かれて、駒のように飛ばされる。それを追いかけるように、モモがあわわとしながら駆けて行つた。優稀はそれを見て、戦場ながら、ポカーンと口を開け呆然と。いやいや、と首を振り、再びヤミの方を向く。

襲撃者の一人、最初に襲つてきた男がヤミに手を伸ばし、その身体に触れようと迫り——。それを見た瞬間、優稀は地面を蹴つていた。足元に運良く落ちていたそれを両手でしつかりと握つて。

「やあっ！」

ゴフツと口から漏らし、男子生徒が少し後退してその場に倒れる。突然目の前から迫つていた人物が消えたヤミは驚愕しながら、優稀に視線を向けた。そこには手に少し長めの木の棒を握り、身体はたつた今視界から消えた男子生徒の方を向き、静かに息を

整えていた優稀の姿。——『突き』を勢い良くはなつた彼は次の標的に視線を向け、木の棒を構える。

「金色さん、今のうちに……！」

そう言いながらまた一人に『突き』を放ち、その鳩尾を捉えた。その声にヤミはハツと我に帰り、自分を拘束する者達を“変身”能力で弾き飛ばし、気絶させる。

「えつちいのは、嫌いです……！」

頬を染め、怒りの表情を浮かべたヤミは倒れた者達にそう放つた。

* * * * *

「ヤミさん！ 大丈夫でしたか？ ……あと葵さんも」

そちらも終わつたのか、モモはやや焦つた表情で、リトと一緒にこちらに走つてきた。
……最後に優稀を付け足して。しかし、モモ達の後ろに巨大な花が見えるが、あれはなんなのだろうか。優稀は疑問に思いながらも、モモの言動への反論を優先した。

「大丈夫です」

「俺はついでっすか……」

「そうですが、何か問題でも？」

くつ、と悔しそうに声を上げる優稀を見て、ヤミはホツと息を吐く。

それにしても、ユウキには戦闘の経験が……？

先程のまるで洗練されたような『突き』を見て、ヤミはそんな疑問を持った。しかし

そんな疑問は記憶の彼方へと飛ばされることになる。

——やはり、誰一人息の根を止めてはいなか。

それは襲撃者である男子生徒の一人から発せられた声。

しかし、何処か誰かの声が混じったようなノイズが入った声だつた。

——地球で牙を抜かれたという情報は、本当だつたらしいな。

「……何者ですか」

——本当の君を知る者だよ。……目を覚ませ、金色の闇。

冷徹でありますながら何処か面白がるような、そんな声がその場にいる全員の耳に響く。

——ここは君のいるべき場所じゃない。

優稀は無意識のうちにヤミの隣に立っていた。

——君の『本質』は、闇。殺戮以外に生きる価値のない存在。

「……」

——甘い夢などもう終わらせるべきだ。暗殺対象は……
ターゲット

ヤミはゆつくりと後ろを振り向く。

その視線の先には、モモの後ろに庇われるよう立っている結城リトの姿。
——すぐそこにいるのだから。

その声は何処までも暗く、まるでヤミをその暗闇の中へと誘いこむような、禍々しさを持つていた。

重苦しいほど沈黙。

それは草木などにも影響を及ぼし、染み渡る。風が止み、草木が鳴らす音も聞こえず、また学校から響く生徒達の声すらも——止んでいた。そんな雰囲気、誰も何も言葉を発しない……いや、発せない空気の中。それはリトの、モモの、見えない敵の、そしてヤミの。それぞれの耳に響き渡る。

「……バカだろ」

こんな状況だというのに何故かいつもの調子で、しかししっかりと相手にその意図を伝えるように。優稀の声が、響く。それは何故か。もちろん、決まっている。優稀の中で、ヤミは心のない殺戮兵器などではなく。変えようがない、かけがえのない、一人の友人だから。

——…何？

その禍々しさの混じる声が、若干だが揺れた。

「金色さんはもう人を殺したりしない」

——ほう。

「いや、俺が絶対に殺させたりしない。何ができるかわかつたもんじやないけど、俺は今
の金色さんのほうが良いと思うから」

ま、昔の金色さんを知ってるわけじやないけど、と。

「……！」

ヤミの無表情な瞳が大きく見開かれた。それは光を伴い、移り、そして一人の少年を
映し出す。

——ははつ、なるほど。言うな地球人。そうか、それなら……

心底面白がるように、嘲笑うかのように。楽しさ——いや、愉悦を含んで。

——まず最初にお前を殺してやろう。

一羽のカラスが屋上から飛び立つた。

第三話 『束の間』

——どうしよう。

春休みも終わり、午後の授業が開始するチャイムを聞き流しながら、優稀は教科書も開かずにぼーっと黒板を眺めていた。周りには授業が開始してすぐだというのに、昼食を食べて眠くなつたのか、こくりこくりと船を漕ぐ男子生徒や、眞面目にノートを取る女子生徒、熱心に転入生を見つめる男子生徒たちなど様々な行動を取る人達がいて、見る分には飽きることはない。だというのに、どうして優稀がただぼーっと黒板を眺めているのか。それはもちろん、昼休みに彼の身に起きた出来事が原因だ。

……結局何だつたんだ?

操られた男子生徒達からの襲撃と戦闘、ヤミの昔を知る者との接触。ごく一般的な生活をして来た優稀には、それらの出来事はあまりのも異質すぎて、正直思考が追いついていない。話の最後にあれだけ啖呵を切つていたのに何を言つてゐるんだと思うかもしれないが、あれは友達への信頼と……”結城リト”という、襲撃対象一人の状態から”結城リトと、何故か金色の闇と親しい一般人”という風に注目を分散させようと考えた結果だ。巻き込まれたといえば、確かにそうだが。自分から巻き込まれに行つた、と言

われても反論できないような行動もある。後悔はしていない。それは絶対だ。友達を信じることに、それを言葉にしたことに後悔などするわけがない。……ただその後の、突然の殺害予告により絶賛頭抱え中ではある。

「葵、こここの問題の答えはなんだ」

「16です」

「……正解だ」

さらにその謎の相手が言っていた、昔のヤミとターゲットについて。優稀は昔の彼女を知らない。というか彼は地球人で、彼女は宇宙人なのだから、知らなくても何ら不思議ではない。……しかしだからこそ、気になつたのだ。そんな昔のヤミについて。

……前までは別に気にならなかつたんだけどなあ。

おそらく事件に実際に巻き込まれたというのが原因だろうけど、と優稀は右手のシャーペンをクルクルと回しながら、簡潔にそう考える。そもそも、ヤミが戦っているところを見るのすら初めてだった。いつも本を読みながら、たい焼きを食べている彼女が、それが普通だと思っていたから、尚更優稀の驚きは凄まじいものになつてしまつている。

それともう一つ、ターゲットの存在。あの時、ヤミの視線はモモではなく、その後ろにいたリトへと向けられていた。そうなると、ターゲットとは暗殺対象のことでの、その

暗殺対象が結城リトその人であると考えるのが妥当なところだ。

でも……なんで？

優稀は首を傾げる。
どうして地球人であり、彩南高校二年生である結城リトが宇宙の殺し屋の暗殺対象なのか。

「……葵、この問題は？」

「3Xです」

「……。……ではこれは？」

「20です」

……本当に一体あの先輩は何をしてかしたんだろう。あ、そういういえば結城先輩つて、今朝女の先輩のスカートに突っ込んでた人じや…………なんか途端に怪しくなつてきたぞ？

思考が何やら変な方向に向かっているので、一度頭を振つて仕切り直す。結城リトが暗殺対象である理由。あれだろうか。デビルーグ星の王女達と関わりを持つてゐるから、とか。しかしそれなら、他にも何人かいるかもしれない。というか、いる。優稀の隣人、妹の方。西連寺春菜だ。彼女は第一王女であるララと友人関係にあり、その妹達とも接点を持つてゐる。もし、暗殺対象である理由が本当に関わりを持つてゐるだけな

ら、春菜も対象になつてゐるはず……。

「……葵、じゃあこれは……？」

「7です」

「…………。……それならこれを答えてみろ」

「えつと、42です。……というか何ですかさつきから俺ばかり。しかもそこの今やつてるところより、かなり先じゃないですか。特定の生徒いびりはやめてください、先生」範囲が先なのに答えて、さらに正解している優稀。それに驚き、騒めくクラスメイトと居心地悪そうにしている数学担当教師。……そして、何故か笑つている隣の赤髪おさげと忌々しげに見つめてくる腹黒王女。

何だろうこのカオス。まともな人間をどうか寄越してください。

「す、すまん……だがな、授業中に百面相をしているお前も悪いと思うぞ」

「うつ……すみません。集中します」

顔に出てたのか……と少しショックを受ける優稀はそこでようやくノートを開いて、シャーペンを握った。では、再開するぞという教師の言葉で授業が再開される。その頃にはクラスメイトも落ち着き、またそれぞれの行動を開始。

……うーん、やっぱ考えてわからんな。

知らないことはわからない。まして、宇宙に関してのことなど、今まで極普通に暮ら

してきた優稀にとつては、未知とも言えるもの。だから、考えても仕方がない。そう結論を出した優稀は今も続く笑い声の方向。左隣へ、

「黒咲、笑いすぎ」

ジトーッと、抗議するような視線を送った。

* * * * *

「あははっ♪ だつて、ノートもとつてなくてぼーっとしてるので、ユウキくん全問正解なんだもん！」

あはは、と続けて笑うメアに優稀はため息をつきながら、頭に手刀を落とす。それに痛^{いた}あと言いながらも、なお笑う彼女にはもう目も当てられない。だから仕方なく、本当に仕方なく優稀は流れるようにデコピンをかました。すると今度はあうつ、と声が。

「黒咲は、ホント反応面白いよな」

こう、なんかズレてる気がして、と付け加え優稀は苦笑い。

「ユウキくんこそ面白いよっ♪」

「……いや、どこが」

うーん、性格とか？　と何故か疑問形で返してくるメアに、優稀は何で疑問形……、と呆れたように吐き捨てる。

「——それで、ユウキくんはいつになつたら私のことメアって呼んでくれるのかな？」

そんな優稀に対し、メアは楽しそうに笑いながら、しかしやや不満げな様子でそう言つた。

休み時間。授業と授業の間の休息の時間。優稀は迷わず席に座つたまま、隣の赤髪おさげに抗議運動を行つた。内容はもちろん先程の授業中、バカなくらいに笑つてくれたことについて。そうして、返ってきたのがこの質問である。だが、優稀のその質問への回答は一つ。すでにもう決まつている。

「まあまあ、落ち着けよ黒咲」

悪戯っ子のように笑つて。

実はこのやり取り、二人が話し始めた頃からずっと続いている。メアが『名前で呼んで？』と言つて、優稀は答えを曖昧にしながら、名字呼びで返す。さすがに毎日ではないが、一週間に一回はやつていると本人達も自覚はしている。しかし、二人は止めようとしない。何故なのか。答えはただの悪ノリである。

「うん、全然わかつてないよね?」

「え? 何をかな黒咲」

「あは♪ 私結構本気だよ?」

「……さん外したんだから、それでいいだろ」

はあ、とため息を一つ。

話し始めた当初の優稀はメアのことを『黒咲さん』と呼んでいた。それが今では『黒咲』となつている。優稀としては、別に名前で呼んでもいいんだが、なんか壁を感じるんだよなあ……。

彼女の接し方に何処か壁を感じるのだ。それが何が原因でそうなつてゐるのかはわからないが、仲良くなつてから経つた月日の問題もあるかもしれない。だからまあ原因はともあれ、この壁がなくなつたら、きっとその時が優稀が彼女を『芽亞』と呼ぶときだろう。

えー、と不満そうな声をもらす彼女に優稀は、気が向いたらなどだけ答えて、またしてもデコピンを一発放つ。今度はふあー、と。

「じゃあ早く気が向いて?」

「……いや、どんな頼みだよ」

こう言つてはいるが、言葉ほど優稀の表情は険しくはない。逆にむしろ少し笑つてい

るくらいだ。メアも実に楽しそうな笑顔でそんな優稀のことを見ていた。

「なんだオマエら、なんか楽しそうだな」
そこに響くもう一つの声。

話し方といい、態度といい、双子とは言つても全部が全部似てるわけじゃないんだな、と優稀は声をかけてきた彼女に対し、ふとそんなことを思う。……もう一人のあの忌々しいピンクヘアーを思い出しながら。

「あつ、ナナちゃん！」

「おーメア、さつきぶり！……で、オマエは？」

ナナ・アスター・デビルーク。デビルーク星第二王女にして、モモの双子の姉。ツインテールでややつり目の少女だ。優稀の知らない間に、二人はどうやら仲良くなつていたらしい。そもそもメアは友達が少ないので、優稀としては珍しく感じられた。

「この人は、ユウキなんだよ♪」

「えー、それだけかよ……。葵 優稀だ。ナナ・アスター・デビルークさん」

「おお、オマエがユウキか！」

……何だろう、この予想外なくらいの反応の良さ。黒咲が何か入れ知恵でもしたのだろうか、と優稀は何故か隣で満面の笑みを浮かべているメアを睨む。しかし、メアはそれに対し首を傾げるだけ。まるで悪気の無さげな彼女を見て、結局。はあ、とため息を

吐いた優稀は、

「……この赤髪おさげが何か言つたんだな？」

もう完全にメアが入れ知恵したと断定した質問を投げかけた。あれ、名字ですら呼んでくれなくなつちやつた、と隣で何故か不満そうなメアを完全に無視して。

「ああ！ メアが面白いヤツがいるつて言つてたんだ！」

「ね、面白い人でしょ？ ナナちゃん♪」

「確かに面白いよなあー。特にさつきの授業中とか——」

二人は女同士で会話の花を咲かせる。そんな光景を見て優稀は少しだけ驚いていた。まるで普通の女の子みたいだ、と。もちろんピンク髪ツインテールに対して。

デビル一ク星の第二王女としてではなく、一人の少女として。

そんな言葉が合うほどに、彼女は純粹にメアとの会話を、友達との会話を楽しんでいる。裏でこそそと何か企んでいるどこかの腹黒王女とは大違ひだ。そして、そんなナナを見て優稀は午前中思つていたことを密かに訂正することにした。『関わらなければいい』と思つていたことを。だから――

「——まあそんなわけだから、ユウキ。これからよろしくくな！」

「おう。こちらこそこれから宜しく頼むよ、ナナ」

名前で呼ぶ。表裏の無さそうな、そんな彼女のことを。お互に手を前に出して握手

を交わし、笑い合う。ナナは嬉しそうに、優稀は穏やかに。しかし、そんな二人に対しても面白くないと思つてゐる少女が一人。

「あー！　するーい！　何でナナちゃんのことはナナって呼ぶの？　私のこともメアって呼んでつて言つてるのに！」

うがー、とまるで子供のように。先程とは逆に今度はメアが優稀に抗議するような視線を送つた。そんな視線に優稀はまたしても悪戯心丸出しの表情で、

「黙りなさい、黒咲。それに関してはさつき、気が向いたらなつて答えただろ」

「……むう」

「あははっ、面白い顔になつてるぞ、メア！」

プクッと頬を膨らませて、その整つた眉を寄せるメア。そんな彼女にデコピンを放つ優稀。それを見て、笑うナナ。どこからどう見ても、仲良く見える三人。……一人は不満そうではあるが。そんな彼らの笑い声は次の授業開始のチャイムが鳴るまで、教室に響いていた。

——どこまでも暗く、深い闇の存在にはまだ誰も気づかない。

——敵の正体は一体何なのかしら……。

今日、最後の授業。眞面目に聞いている姿勢をとりながら、昼休みの出来事について考える。

間違いなく、敵の狙いはヤミ。だが、殺そうとしている雰囲気はなかつた。いやそれどころか逆に、人を殺さなくなつたヤミをわざわざ焚きつけるかのような言動で、挑発していた。となると狙いは——

……ヤミさん自身による、結城リトの抹殺……。

考えられるとすれば、これだ。そして、ヤミをもう一度殺戮兵器へと戻す。今度こそ闇の世界から出られないようにするために。しかし、もしそうだとしてもあるの声の正体は何なのか。それがわからない限り、何もかもが後手後手に回つてしまふ。そして、その結果最悪の事態に——。

そうはさせないわ……！　リトさんは必ず私が——守つてみせる。

まずはリトにこのことを伝えるところから。モモは髪の先を弄りながら、決意を固め

る。自分の想い人を守るために。そうと決まれば、後は行動のみ。だが、そうなつてくるとヤミの行動を把握しなければいけない。何者かもわからない相手に誑かされたヤミに、自分の知らないうちにリトを殺されてしまうなんてことにはさせたくない。いや、絶対させない。たった今、守ると決めたから。しかしそうなると、方法は……。

やつぱり葵さんの行動を把握するべき、かしら……。

心底不満そうにモモがそう考えるのは、偏に今の所は優稀が一番ヤミに近いからだ。優稀の方はよくわからないが、少なくとも昼休みのヤミは優稀を拒絶するどころか、むしろ受け入れているよう、モモには見えた。特に頭を撫でられているところとか。さら後にその後に、優稀はその謎の相手に殺害予告をされている。ヤミがもし本当に優稀のことを多少なりとも受け入れているなら、狙われている彼を放つておく筈がない。そう考えた末の結論だった。

チラリ、と。モモは殺害予告を受けた張本人をほんのちょっとだけ見てみる。彼は隣のクラスメイトと授業中なのに、何やら楽しげに話をしていた。

の人……私とは関わらないって言つたくせに、さつきナナとは楽しそうに話してたのよね……。

先程の休み時間。

未だ続くクラスメイトからの質問攻めに晒されていたモモは、その最中に何度も優稀

のことを見ていた。決して気になつたとか、昼休みあんなことがあつたから心配だつたとかではない。ただ殺害予告された彼がどんな風に怯えて、どんな風に震えているのかを見て面白がりたかつただけ。しかし、蓋を開けてみれば優稀はナナと赤髪の少女と笑いながら、普通に会話をしていた。

……何でそんなに普通にできるの？

あなたは狙わているんですよ？

モモがそんな彼に対し、何度もそう思つたことか。命を狙われているはずなのに変わらない表情、そして態度。それに何故か妙に苛立ちを覚えたモモは、人知れず拳を握りしめてギリツと歯を鳴らしてしまつっていた。ただそれでも、表面上では笑顔の仮面をつけて、クラスメイトに対応していたのだから、それには流石というべきか。

……大体自覚というものが足りないんです、葵さんには。死の危険に晒されているというのに。それに人が折角、こんなに心配——つて、心配なんてしてませんよっ！　むしろいい気味くらいに思つてるんですから！

一人心の中でそんなことを考えているモモは気づいていない。それが少しではあるが、表情に出てしまつてゐるということに。そしてそんな彼女に対し、先生が冷や汗をかきながら、注意すべきか迷つてゐることにも。

全く、あのには調子を狂わされるわ……。——いやいやダメよ、私。何弱気になつてゐる。振り回さればダメ。何としても主導権を握つて、私と友好的な関係を築いて

もらわないと。そうしたらハーレム計画も円滑に進んで、リトさんとも——うえへへ。涎までは垂らしていないが、授業中だというのに表情が緩みまくっているモモ。もうその思考をしていることがすでに振り回されているということには、もちろん彼女自身全く気づいていない。

「あのー、モモさん？　大丈夫ですか？」

「……」

しかし、幸か不幸かモモは頭を下げて考え方をしていたので、表情を見られることは絶対にない。ただ、それが逆に勘違いされる要因ともなつてしまつていた。心配そうに、国語教師はモモへと呼びかける。しかし、返事はない。何せ彼女は今妄想の世界へと旅立つてしまつているから。

——ああっ……！　ダメですよう、リトさ……んつ！　だめえ……そこもダメですつてえ……あん♡

さらに彼女の肩が震え出す。

実際は如何わしい妄想に耽つてているだけなのだが、それは周りから見ると泣いているようにも見え——

「モモさん……？　モモさん！　本当に大丈夫ですか！」

クラス中が騒めき出す。

心配するような声や慌てる声、またはこの期に入られようとニヤニヤしながら保健室を勧める声。様々が入り混じるが、やはりまだモモは動かない。しかし、今は授業中なのだ。教師としては授業を再開したい。だが生徒のこと、それも今日転入して来た生徒のことなので尚更放つておけない。つまり、何故か学級委員よりも先生から頼られてしまふ優稀に、そんな状況に立たされている国語教師が頼らないはずもなく――

「あ、葵君……」

「え――俺、ですか？ 嫌なんですけど割と本当に」

ブンブンと首が折れるんじやないかと思うほど、何度も何度も頷く国語教師は普段は穏やかで面倒見が良く、優稀も何かとお世話になつてゐる。だからこそ、そんな教師からの頼みを断れるはずもなかつた。

優稀は未だ下を向いているモモの方を向く。

突き刺さるのは、今からモモに対してもう一度声をかける彼への嫉妬のこもつた視線達。出どころは言わずもがな、クラスの男子諸君だ。

……あつ。…………もう我慢できないんですね……？…………いいですよ。――キテ

……♡

しかしそれすら今のモモには届かない。今まさに寸前。最高潮だから。…………何の、と
は言わなゐが。

そんな彼女に——さらに肩の震えが大きくなつたモモに対し、優稀は悪戯つ子のよう
に笑つて、

「——おーい、腹黒王女」

「腹黒王女じやありませんよつ！　　良いところでしたのに、邪魔しないでいただけま
す！」

「なるほど……何が良いところだつたのかは知らんけど、とりあえず周りを見てみろ」
言葉の勢いに倣い、勢よく立ち上がつていた彼女は不満そうに、本当に不満そうに
優稀に従い、その視線を教室内へと移動させる。驚き、驚き、驚き……驚き……おど……
ろ……き……？

「——つ！」

ボンつと音が鳴りそうなほど、一瞬にしてモモの整つた顔に赤みが差した。それはも
うトマト言つてもいいほどに。

「分かつたか？　分かつたら、先生に謝つて授業に集中しろよ？」

「……すみませんでした先生」

いえ。いいんですよ、という先生の言葉を聞くと同時にモモは頬を赤く染めたまま、
自分の席に座り直す。自分の痴態を恥じるように身を縮こませながら。ただ一つ幸
運があつたとするならば、それはクラスの男子が単純だつたということか。彼らはすで

にモモの言動など覚えておらず、『恥ずかしがるモモちゃん可愛い』という言葉でその思考の大半を埋めてしまっている。

しかしそんなことすらモモは考えることができない。羞恥心……それも妄想によるものならば尚更。それが思考を止めているから。だから彼女はあれほど不満に思つていた『優稀に従う』という行動を素直に実行してしまつてゐることにすら、気づいていない。それとクラスメイトの前で声を荒げてしまつたことにも。……まあ、それも全て自業自得ではあるのだが。

——私としたことが何てはしたないことを……！

それから授業が終わるまで、モモの顔はずつと羞恥に染まつたままだつた。

第四話 『自覚』

「——はあ」

重苦しいため息が廊下に響き渡る。しかし、それに反応する者は一人もいない。……いや、もう人がいないのだ。

すでに窓からはオレンジ色の光が差し込み、廊下を綺麗に彩っている。つまりは放課後。部活動生は各自の部活に赴き、帰宅部の面々はすでに帰路についている頃だ。

そんな時間帯だというのに、疲れた表情を浮かべた帰宅部の少年——優稀は、もう何度も目からわからない溜息を吐きながら、ようやく帰路につくために靴箱へと向かっていた。

「なんで俺が文句言われなきゃいけないんだ……」

先生の頼みを聞いただけなのに、と。

そう不満げに呟く優稀はイライラしているというよりも、疲労困憊という方が正しく感じられる。言うなれば、一切休みなしで一日中働いてきたサラリーマンのような感じ。休み時間ありの通常授業だったのに、どうして優稀がここまで疲れているのか。もちろん原因はある。ただそれがあまりにも理不尽なものだつただけ。

「あの腹黒王女。人がわざわざ注意したのに『あなたのせいで、恥をかいてしまったじやないですか』とか、理不尽にも程があるだろ……」

ガツクリと肩を落しながら、つい先程まで続いていたそれを思い出し、優稀はまたしても溜息を吐いてしまった。

終礼後。放課後となつた直後に優稀の机を荒々しく叩いたのは、授業中に妄想に耽つていた少女——モモだった。そんな風に突然やつて来た彼女は開口一番。

『あなたのせいで、恥をかいてしまつたじやないですか！　どう責任を取るおつもりで？』

と忌々しげに優稀を睨みながら、そう言つた。それはまるで全責任は優稀にあるとうような言い草で、元々適当に対応しようとしていた彼もさすがにこれには少し強めに言い返してしまつたのだ。そしてそれが今の今まで学校へと居座つてしまふ要因となり、彼がここまで疲れる原因ともなつてしまつたのだつた。

「はあ……何でアイツ一々突つかかつてくるんだ……」

吐き捨てるように呟く優稀。

しかし、彼は遅くなつてしまつたことについては気にしていない。いや、むしろ感謝していると言つてもいいくらいだつた。なんせ帰つたら、秋穂^{ヤツ}の襲撃があるかも知れなから。遅くなればなるほど、彼女が諦めて帰る確率も上がる。理由は不純だが、彼が

図書委員になつたのも、実はこれが関係していた。図書委員は、放課後にも仕事があつたりする。ということは帰るのが遅くなる。よつて秋穂から絡まれる可能性も減る。だから、彼は本当に癪ではあるがモモに少しだけ、ほんの少しだけは感謝しているのだ。

「君はいつも氣怠げだな。少し弛んでいるのではないかな？」

そんな、疲れ切つた彼の耳に突然生真面目そうな声が届く。

男じみた口調ではあるが、声の高さから考えてその人物は女性。落ち着いていて、聞いただけで安心してしまいそうな、そんな穏やかさをもつた声。優稀はその声の持ち主に心当たりがあった。

「いや、疲れてるだけですよ。それより今日は天条院先輩と一緒にやないんですね——

九条先輩

九条凜。

それがその声の持ち主の名前だ。優稀とあまり変わらないくらいの長身で、長い黒髪をボニー・テールに束ねている何処か武士のような雰囲気をもつた少女。

「別に私はいつも沙姫様と一緒にいるわけではないよ」

彼女は背中を預けていた鞄箱から離れ、優稀にゆっくりと近づいてくる。歩き方から姿勢まで洗練されたように様になつていて、最初に見たときは優稀も思わず一步引いてしまつた程だ。

「そうなんですか？」

ああ、と優稀の質問に肯定の意を表す彼女は口元に少しだけ笑みを浮かべ、優稀の正面に立つた。

——要件は大体予想がついている。

「それで……——今日も、ですか」

渋つたような表情でそう問う優稀に彼女はまた、ああと言つて肯定し、そして。

「——是非とも剣道部に入つて欲しい、葵君」

そう、続けた。

「答えは変わりません。もちろん、ノーです」

予想通り。

要件とは『剣道部に入つて欲しい』というもの。それを優稀が予想できたのは、もうこのやり取りを何度も繰り返しているからだ。具体的には優稀が入学した直後から今

まで。

「だろうな。——だが私は諦めないし、諦めるつもりもない」

「……しつこいですよ、九条先輩」

否定しても、勧誘をやめる気配のない凜。そんな彼女に対し、優稀もまた拒絶の意思を崩さない。このやり取りも毎度のこととて、二人の内どちらかの意思が変わらない限り、これから先もずっと平行線だろう。

「大体、先輩は剣道部じゃありませんよね?」

それに、九条凜は剣道部ではない。剣術の心得はあるが、それはあくまで彼女個人の鍛錬の成果であり、部活とは何の関係もない。そんな彼女がどうして自身の所属しない剣道部に優稀を勧誘するのか。

「そうだ。だが、私は定期的にこの学校の剣道部に赴き、部員達に剣の手解きをしている。そんな私が君のことを推薦しても何も問題はないだろう?」

「それは——」

「それに、私個人としても君に興味がある。入学当初もそうだが……—昼夜みの、見ていたぞ」

「ぐつ、と。

優稀はその言葉に押し黙ってしまう。

……見られてたのか。

言われてみれば、当たり前だつた。昼休み。昼食を食べる時間もあるが、同時に休息の時間もある。授業が終わり、昼食を食べて、何処かで休憩する場所を探していた時に見たとか、もしくは委員会の仕事での場所の近くを通つたとか、下手すれば学校の窓からでも見ることができるものかもしれない。しかも、それなりに大きな音も響いていた。むしろ見ていた者がいない方が不自然なくらいだ。

「あの『突き』はどう考へても、剣術を一度……いや、長い期間に渡つて鍛錬してきた者の技だつた。——君は何か隠しているな？」

「…………何も隠しませんよ。とにかく、俺は剣道部に入る気はありません。余程のことがない限り、この答えも変わつたりしません。では、俺は急いでいるのでこれで嘘。真っ赤な嘘。

急ぐ用事など優稀にありはしない。もちろん、これから入る予定もない。それでも彼がそんな嘘をついたのは、ただしつこい勧誘に嫌気がさしたのか、それとも――

「…………ああ、引き止めてすまなかつた。葵君、またな」

「…………失礼します、九条先輩」

優稀は背を向けて、自分の靴箱から靴を取り出し履き替える。その途中、もう一度凛の方を見てみると、すでに彼女の姿はそこにはなかつた。おそらく天条院先輩の元へと

戻ったんだろう、と優稀は何となく予想する。

もう、やめたんだ。そこに未練も後悔もない——。

ブンブン、と頭を振り、嫌な考えを断ち切る。

そして、冷静になつてみれば彼女は自分のことを待ち伏せしていたのではないか、ということに気づいた。でないと、結構遅くなつたというのに、ばつたり鉢合わせるわけがない。となると、結構な時間待たせてしまつたことになるわけで——

「全く……何で俺が」

罪悪感を覚えないといけないんだよ、と。

すでにそこにはいない、しつこい先輩に向けて文句を吐く。それは二年上の先輩に対する小さな小さな抵抗だった。何で自分がこんな思いをしなければいけないのか。それでもこれも全部あの腹黒王女のせいだ、と優稀がさつきまで散々言つてくれたモモに対して、憤りを覚え始めた時。ふと、制服のポケットが振動していることに気づいた。——
着信だ。

「……誰だ?」

電話ではなく、一通のメール。内容は、

『今日は卵が特売ですよ』

差出人は仲良くなつた買い物仲間から。それを見た直後、優稀は昇降口の扉を勢いよ

く開け、一目散に走り出す。

生活費は両親に出してもらつてゐるが、なるべく節約しないといけないと思つてゐるのもまた紛れもなく、一人暮らしに対する優稀の考え方なのだ。

行きつけのスーパーは特売の影響もあつてか、かなり賑わつていた。ちょうど仕事や学校が終まる時間帯ということもあるだろう。老若男女。それもスーツや制服、私服、色々な格好をした人達が大勢。正直中に入つただけで圧倒されてしまいそうだつた。しかし、優稀はそれでも気合いを入れる。よくよく考えてみれば、家の食材も残り少なかつたので、追加しておかないといけない。となると、結構買うことになる。買い溜め、というやつだ。特に長持ちするものは買つておいたほうがいいだろう。そして優稀はまずは特売の卵、とターゲットを絞つて売り場へと向かつた。

「……うわっ、これは無理かも」

目的地に到着し、優稀の目に映つたのは暴走する有象むぞ——いや、荒ぶる主婦の

方々。隣の人を押しのけ、自分の目的のものを得るために、全力で人の波を搔き分ける。その光景は、まるで——本物の戦場だつた。本物の戦場を見たことはないのだが。いや、昼頃少しだけ見た……というか、参加したか。言わずもがな、昼休みの時間のことである。もちろんここまで酷くはなかつたが。

しかし、それでも頑張らないと特売の卵^宝_物は手にできない。それを手にするにはそれなりのリスクを負う必要があるようだ。

——よし……！

気合いを入れて、一步を踏み出す。酷く重苦しいが、根性で歩を進め、やつとの事で戦場の外側、第一陣の目の前まで來た。ここからが勝負だ。失敗すれば、食料^命はない。よつて、失敗は許されない。行くぞ！ そう優稀が意気込んだ——

「あ、葵さん！ メール見ててくれたんだ。はいこれ、特売の卵だよ。運良く二つずつ取れたんだ！」

いやーラツキーだつたよ、と。

続けて、微笑む彼女は優稀にメール送つた張本人であり、彼の買い物仲間兼友人である少女——結城 美柑その人だ。頭の方で束ねてある特徴的なダークブラウンのロングヘアーガ嬉しそうに舞う。

「おお……！」

サンキュー、美柑ちゃん！

正直あそこに飛び込みたくはなかつた

んだ……」

ちらりと黄土色の瞳がその方向を捉えて、ですよねー、と。美柑は苦笑を浮かべた。

「いやーほんと助かつた。持つべきものは買い物仲間、だな」

大袈裟だなー、と笑みを浮かべる美柑からはすでにベテランの貫禄が滲み出ている。優稀はそんな彼女に対し、本当に小学生なのかと一人戦慄した。

「それに小学六年生なのに、一人で買い物して家でも料理しててなんて、美柑ちゃんの将来の旦那さんが羨ましい限りだよ」

「そうかな？ お世辞でもありがとう。でも、その将来の旦那さんが葵さんって可能性もなくはないんだよ？ ――何なら立候補してみる？」

悪戯っ子のような表情で優稀を見る美柑に、その視線の先の張本人は乱暴に彼女の頭を撫でながら、

「はつは、小学生が高校生を揶揄わない」「……もう、子供扱いしないでくださいよ」

不満そうな表情でそう言いながらも、撫でてくる手から頭を離さない美柑。素直なのが素直じゃないのか、わからない行動だ。そしてこうしてたまに敬語が出てしまうのも、まだ慣れていないから仕方がない。彼女が敬語を取ったのはつい最近のこと。すぐに慣れると言われても無理がある。まあ優稀はそんなこと言わないし、言うつもりもないが。

「いやいや、まだ小学生だし子供だよ。存分に甘えるが良い、全てこのお兄さんが受け止めて差し上げましょう」

「うわー、葵さん素敵！」

「うん、棒読みにもほどがあると思うんだ」

そうは言うが、実際美柑はあまり甘えていないだろうな、と優稀は思っている。一緒に買い物していく思うが、彼女は自分がしつかりしないといけないと思っている節があるのだ。それは小学六年生が考えるにしてはあまりにも早すぎること。確かにしつかりしないといけないと思うことは悪いことではない。むしろ良いことの部類に入る。しかし、それでも彼女はまだ小学生なのだ。まだまだ親に甘えても何の問題もない時期。だから、冗談めかして言つてはいるが、優稀はわりと本気だつたりする。
 「でも、ホントに無理してないか？」もし何かできることがあるなら、いつもお世話になつてるつてことで、協力くらいするけど

「もう、葵さんは心配性だなー。大丈夫ですって、もう慣れだし、それに最近は居候が増えて、家事とかも手伝ってくれるようになつたしね」

優稀の心配するような声を聞いて、美柑はふふっと笑つて応えた。
 「へー、居候が増えた？」 確か最初に聞いたのが、一年前だつて。……今何人で住んでるんだ？」

いや、そもそも居候が増えるつてどういう状況なんだ、と優稀は内心驚きを隠せずにいた。一年前、こうして同じように一緒に買い物していた時、ふと美柑の買う食材の量が増えていることに気づいた。確かにその時だ。『居候ができたんです』と聞いたのは。そしてそれがさらに増えたと言う。そうなると、一体何人で住んでいることになるのか。

うーん、と。

美柑は虚空を見つめながら、指を一本一本折つていく。一人、二人……三人……

――。

「両親抜いて、私も入れて六人ですよ」

なかなかの大所帯だった。優稀の家の二倍。しかも、両親抜いてそれ。さらにそのうち四人が居候とは。優稀は先程の驚きをさらに深める。
 「それでその中の一人が最近、家事を手伝ってくれるんだけど……」

「ん？ 何か問題もあるのか？」

家事を手伝つてもらえるのは良いことのはずなのに、何故か表情が冴えない美柑。そんな彼女に優稀もやや表情を曇らせて問いかけた。何か問題……例えば、家事がド下手でさらに手間がかかるようになるとか、そいつがかなりの変態で変な目で見てくるとか。そんなことだろうか。

「うーん、問題つてわけでもないケド……最近、兄にベタベタしすぎというか、何か企んでいそぐなんですよ」

美柑はまるで疑うように、頭の中で思い浮かべているだろう人物に対し、一つ溜息を吐く。まあ私の考え過ぎかもしれないんですけど、と不満げに。そんな彼女に優稀は戯つ子のような表情を浮かべ、

「ふーん、なるほど。要するにブラコン美柑ちゃんは大好きなお兄ちゃんをその居候に奪われそうで、不安になつてるんだな——って、ごめんごめん。だからそんな目で見るのやめてくれ」

「……葵さんが悪いよ。私は別にブラコンつてわけじゃないし、不安になんかなつてない。……何で撫でるんですか」

じと一つと責めるような視線を送つてくる、素直じゃない彼女を優稀は無言で撫でる。しかし当の本人は不服らしく、さつと離れて自分の買い物を始めてしまった。

「素直じやない美柑ちゃんが悪いって」

「葵さんみたいに捻くれてないだけマシじやないかな?」

「うわ出た、毒舌」

ニヤニヤ、とお返しとでも言うかのようく笑う美柑はまるで悪戯っ子の様だった。元々容姿が整つてあるということもあってか、何処か魅惑的な雰囲気を醸し出しており、それがまた質の悪いほどに彼女にとても似合っている。それはそこらの……いや特に優稀のクラスの男共なら間違ひなく虜になつていたと言つても過言ではないほどに。

中学生かと言われてもおかしくないくらいに小学生とは思えない大人びた雰囲気、落ち着いている性格、そして表情豊かに感情を表す整つた顔に、少しの毒舌。加えて家事も難なくこなす。毒舌であることを除けば、非の打ち所がない少女。

「美柑ちゃん、学校でかなりモテるだろ」

だから、そんな条件が揃つていて相手にこんな質問をしてみたくなつた優稀は何も悪くないだろう。まあただ的好奇心ではあるが。

「唐突だね……でも、うん。よく告白はされるよ」

「あれ? 否定しないんだ」

だつて事実ですし、と応える彼女の顔からは何処か疲れの色が見え隠れしていた。

結城美柑はモテる。それはもう学校のマドンナと言つてもいいほどに。

「誰かと付き合つたりしないのか？」 良い奴も何人かくらいはいただろ」

「しませんよ」

きつぱりと言い切つた。しかし表情は先程と同じく何処か疲れたようなもの。彼女はしょっちゅう告白されるが、その全てを断つてゐる。

「即答ですか……もしかして、もうすでに好きな人がいるから……とか？」
「……い、いやいや、好きな人なんていないからね！」

「お、その反応……なんか怪しい」

ニヤニヤ、とさらにお返しするように優稀は、若干ではあるが頬を染める美柑にそう言つた。心底楽しそうなのは、さつきのお返しができたからだ。決して頬を染めて、少し拳動不審になる美柑を面白がつてゐるわけではない。そう、決して、だ。

「しかもその好きな人が、お兄さんだつたりして……つて、そんなわけないか」
あはは、と笑う優稀は、隣でやや赤面する彼女には気づかない。

「そ、そういう葵さんこそ、モテるんじゃないですか？」

あ、ごまかした、と指摘する優稀に美柑は「いいから答える！」とジトつと視線を向けながら、催促する。彼女自身、それ以上詮索されたくないのか、はたまた好きな人が誰にも言えない理由があるのか。どちらにせよ、彼女が自分の好きな人を教えることはないのだが。

まあいいけど、と優稀は続ける。

「……それは一度もコクられたことのない俺への嫌味ですかね、美柑さん」

今度は忌々しげに。

優稀は今までの人生で誰かに告白されたことはない。それは紛れも無い事実だ。
……想いを寄せられているかどうかは、また別の話だが。

「女友達は……まあいるけど、今現在全然モテてないよ」

多分これからも、と。

「……なら、好きな人は？」

「もちろん、いません」

優稀もまたきつぱりと。

彼からしたら、好きな人など作っている暇がないのだ。主に隣人の襲撃や従姉の思いつき、最近に至ってはピンク髪の腹黒王女のせいでの。

「ふふつ、そうなんだ。——あ、そういえば」

唐突に。

美柑は手をパチンと一度叩いて、何かを思い出したかのように目を見開いた。そして、隣を歩く優稀を見上げるように見て微笑む。

「今度私の友達が泊まりに来るんだけど、葵さんもどうですか？」

「美柑ちゃんの友達？ 小学校の？」

「えーと、小学校のじゃなくて……うーん、なんて言えばいいんだろう。……まあとにかく、私の一番の友達なんだ！」

嬉しそうに目を輝かせる美柑からは、その友達をどれだけ大切にしてるかがよくわかる。しかし、小学校の友達じゃないとなると、一体誰なのか。気にはなるが、一番の問題は。

「俺なんかが行つて、迷惑じゃないか？」

美柑とは友人だが、その友達とは初対面。

しかもお泊まり会にお邪魔するとなると、自分は邪魔者だろう。もちろん、美柑はそんなことちつとも思っていないが、その友達からすると、という話だ。

「大丈夫だよ。普段は無表情だけど、優しくて落ち着いてて、かつこいい人ですから」

「うーん、その相手の人がいいならいいけど……ちなみに日時は？」

「明後日が土曜日なので、明日の放課後にしようかと思つてるんだけど」

実のところこのお誘いは、優稀にとつてありがたいものだつた。何故か。もちろん秋穂の襲撃を避けられるからだ。しかし、それは女子小学生の家に男子高校生が泊まるということになるので……些か問題ではある。

うーん、と迷う優稀。そんな彼に美柑はまたしても悪戯つ子のような笑みを浮かべ

て、

「葵さん、確かにさつき『できることがあるなら、協力する』って言いましたよね？」
うぐつ、と痛いところを突かれたとばかりに。

「それに『存分に甘えるがいい』とも」

「……。……はい、行かせていただきます」

情けないが、仕方ない。それと言われてはトドメを刺されたも同然。それにやつた！
と声をあげて喜ぶ、笑顔の美柑を見られたので優稀はもう、それでもいいかと諦めた。
内心、自分も喜んでいたのは秘密だ。

こうして、買い物仲間兼友人、結城美柑宅へのお泊まり会が決まった。

この時の優稀は、そこで起ころる新たな波乱を知る由もない。

* * * * *

「……美柑ちゃんも大概強引だよなあ」

優稀は買い物が終わつた後、袋を持ちながら楽しみにしてますね！　と言つて去つて行つた美柑に対し、そう呟く。待ち合わせは明日の夕方。学校が終わつた後、あの

スーパーで、だ。まるでまくし立てるように待ち合わせの時刻と場所を伝える美柑の姿は記憶に新しい。まあ、ついさっきの出来事なので当然ではあるのだが。

優稀はもう暗くなり始めている空を見ながら、自分の住むマンションの通路を歩く。どうか自分の部屋に秋穂がいませんように、と願いながら。

そんなことを考えながら、空を眺めていた優稀はふと自分の住まいである部屋の前に人が立っていることに気づく。

……こんな時間に、誰だろう。

警戒心を強めながら、ゆっくりとその人物に近づいていく。

——まず最初にお前を殺してやろう。

「——っ!?

昼休みの出来事が脳裏をよぎる。もしや自分を殺しにきた刺客だろうか、と優稀はただただ冷や汗を流した。もし、自分を殺しにきたのであれば、対処などできはしない。今いるのはそれぞれの部屋の前の狭い通路。襲われれば逃げ場などなく、如何にか戦うにしてもこの通路では戦闘行為を行えるかすらわからない。

予想以上に悪い状況に優稀は震えそうになる足を如何にか動かしながら、視線の先の人物の動きを一つも見逃さないように、凝視する。

——どうする……逃げるか……?

少しでも目を離せば、一瞬で殺されるかもしれない。それに背を向けたら、それが最後かもしれないのだ。逃げる、なんてことは……できるはずもない。そんな不安と緊張の中、ようやくその人影は優稀の方を見た。いや体を向けた、が正しいか。足音が近づいてくる度に大きくなる心臓の鼓動。しかし、そんな優稀の心情など御構い無しにその人影はゆっくりとした足取りで優稀に近づいてくる。空はすでに暗くなり、未だその顔は見えない。服装は……ん？ 彩南高校の制服？

「おーい、優。そんなどこで突つ立つてないで、早く部屋に入れなさいよー」

「——」
ほうつ、と自分で緊張の糸が解けるのがわかつた。目の前の人物は殺しにきた刺客なんかではなく、昔からの付き合いである少女だつたからだ。ウエーブがかつた小麦色のショートヘアを揺らしながら、その葡萄茶色の瞳が優稀の黒の瞳と交わる。

「……はあ。里紗姉か。脅かすなよ」

「里紗姉かつてなによ。アンタの大好きなオネエチヤンが来てあげたんだから、感謝しながらよねー」

カラカラと笑う彼女の名前は畠岡里紗。彩南高校二年生でテニス部に所属する、優稀の従姉だ。彼女の声を聞いて想像以上に安心している自分に驚きながら、優稀は落ち着きを取り戻した心臓のある部分を手で撫てる。

——よかつた。

ようやくだつたのかもしれない。自分が危機的状況に置かれていると自覚したのは、あんなことを言われても、実際に命を狙われたことのない優稀にはどうも実感が湧かなかつたのだ。どれほど自分が危険なのか、が。しかし、今まで少しではあるが自覚することができた。自分は狙われている。今回は運が良かつただけで、状況はなにも変わつていい。しかし今は、今だけは安心を隠すことなどできはしなかつた。

「だーれがお姉ちゃんだ。ただの従姉だろ。……それよりいきなり来るなよ、焦つたわ」「いやいや、メールしましたケド?」

「……あ、ホントだ」

携帯を確認してみると、そこには確かに里紗からの着信があつた。……ただ文面が『今日行く』だけのはどういうことだろうか。これでは、どこに行くかもわかつたもんじゃない。優稀はそんないつも通りの里紗を見て溜息を吐くと、自宅の扉を開け、「ごめんごめん、じはどうぞ」

そう言つて、自宅の中へと促した。

「ただいまー」

……いや、その挨拶はどうなんだ?

第五話 『闇と光』

フフツ。

流れる夜風。

色とりどりの光に包まれる彩南町をゆつたりと通り過ぎるそれには、楽しげ——いや、愉しげな笑い声が混じっていた。何かを嘲笑うかのようだ、そしてこれからどうなるかを純粋に愉しむかのようだ、そんな笑い声。過ぎ行く風はその声と混ざり合い、虚空へと運び、やがて誰の耳にも入らぬまま、スッと。まるで元からそこになかつたように闇へと溶け込んだ。

「あはっ♪ マスター、今日は何か愉しそうですね？」

とあるビルの屋上。

光源がなく、闇に紛れるその場所は月の淡い光に照らされているからか、どこか怪しげだった。そんな場所、それも地面が遙か遠くに見える屋上の端。そこには腰を下ろし、空中へと足を投げ出している少女の姿。漆黒の戦闘服バトルドレスに身を包むその少女もまた愉しげに笑う。血のように真っ赤なおさげ髪が風に揺らされ、怪しげに蠢いた。

先ほど風に運ばれた笑い声の持ち主ではない彼女は、彼女自身がマスターと呼び慕

う、相手へと質問を投げかける。——どうして今日はそんなに愉しそうなのか、と。いつもはどこまでも暗く深く、寒気がするほどに冷徹なのに。

——フツ、何……少し面白そうなもの玩具を見つけただけだ。

ふーん、と赤髪の少女はあまり興味がなさそうに相槌を打つた。それ以上詮索はしないし、するつもりもない。それにどうせ聞いたところで上手くはぐらかされるか、お前には関係ないとバツサリ言われるかのどちらかだ。

——そういうお前も愉しそうだな。

次に問うたのは、相手だつた。しかし、その場に赤髪の少女以外は存在しない。それ以外にいるのは、やけに大人しい真っ黒なカラスだけ。

「聞いてください、マスター！」 私、今日初めて女の子の友達ができたんですよ。素敵でしょ？」

いかにも嬉しい……というほどに喜色の浮かぶその声に合わせ、その表情もまた喜色を示す。吊り上がった口角は彼女の整つた容姿も相まって、何処か妖艶な雰囲気を醸し出していた。

————まさか、お前まで温かい生活で本来の目的を忘れてはいないうな？
まっさかー、と明るく、まるで意に介していないように少女は嗤う。

「ちやーんと覚えてますよ。——ヤミお姉ちゃんを元に戻す……そうでしょ？」

——そうだ。……今の金色の闇では、私の目的を果たす役には立たない。本来の彼女に戻つて貰う必要がある。

冷徹に発せられたその声は、禍々しさを伴い、闇夜に木霊した。まるで目的を果たすためなら、どんなことだろうとやる。そう、言うように。

——そのための方法は一つ。

「わかつてますつ。せんぱいを殺せばいいんですね、ヤミお姉ちゃんが♪」

——フツ、わかつているなら問題はない。

「じゃあじやあ、学校では自由にしていいですね！」

ああ、とその声は肯定する。それに「やつた♪」と少女も続いて喜びの声を上げた。

——ああ、そうだ。メア

「? どうしました?」

メアと呼ばれた赤髪の少女は、今思い出したように言う相手に、首を傾げながら問いかける。

——お前の、最初の友達とやらは元気か?

「ユウキくんのことですか?」

元気ですよ!

今日も授業中、面白くつて――

明るく、楽しげにメアは昼の出来事について語り始めた。本当に楽しそうに、普通の一人の少女のように、一つ一つ今日の出来事を思い出しながら。

——そうか。……それなら、いい。

フツ、と再度笑い声。未だ語り尽きないと言う風に饒舌に自分の友達について話しているメアを見ながら、その相手は愉快そうに嗤つた。

それはまた同じように風と混ざり合い、同じように虚空へと溶け込む。

一人の少女と一緒にカラスを、淡く光る月だけが、ただただ映していた。

「ユウキ」

呼ばれた声に振り返ると、突然腕を掴まれ、半強制的に引き摺られるようにその後ろをついて来させられる。

放課後の、それも帰り間際。

そんな時間帯ということもあり、昇降口に向かう途中だったので帰り支度は済んでいる。……が、今日はこの後予定があるので。用事があるのなら、手短に済ませてもらいたい。それなのに目の前の金髪は何を考えているのか。訳も言わないまま、ズンズンと

いつもの漆黒の戦闘服^{バトルドレス}に身を包み、金髪を揺らしながら、早足で進むヤミを見ながら、生徒の間を通り抜けていく優稀は、ただ首を傾げるのみだった。

「ちよつ、金色さん!!　いきなりどうしたんだよ!」

ハツと放心状態から抜け出し、叫ぶように出した焦る声は、どうやらちゃんと届いたらしい。階段を降りる一步手前。相手が歩みを止め、手を離し、振り返る。金髪がやや激しく揺れた。

「……突然引っ張つてしまつたことは謝ります。ですが、今は急いでいるので、手短に用件だけ」

そういうヤミは表情を変えていない。いつもの無表情だ。だというのに優稀にはそれが、どこか楽しそうに、ワクワクしているよう見えた。

「——私の信頼する友達にあなたを紹介すると約束しました。それを破るわけにはいきません。今は何も言わず、ただ私について来てください。……どうせ暇でしょう」
どうせ暇。

そう言われたことに「今日は暇じゃないんだよ!」と返答したかつた。しかし結局何も言うことできず、また腕を取られ、優稀は歩き出す。ヤミに引っ張られる形で歩き出す。制止の声はかけられない。というか、かけても反応してもらえない。それにいつも、程度の違いはあれど暇ではあるので、彼女の言葉はあながち間違っていない。だか

ら否定もできない。よつて、優稀が出来た行動は。

——あらやだ、漢らしい……。

と心の中で呟きながら、ズボンのポケットから携帯を取り出し、よく知る買い物仲間へ、

『ごめん美柑ちゃん、今日行けそうにない。ほんとごめん。理由は後で連絡す』
というメールを送ることだけだつた。

……やや最後の文字が足りなくなつてしまつたのは仕方がないことだろう。気にしてはいけない。

そんな感じで優稀が強制連行される少し前。

彩南高校よりも早くに放課後を迎えた彩南第一小学校。その通学路。

最高学年、六年生ということもあり大詰めとなつてきた委員会の仕事、そして日直の仕事をクラスメイトや友人達がやや引くほどの早さでこなし、たつたの15分で片付け

たスーパー小学生、結城美柑は一人で帰路についていた。

仲良し三人組と評される彼女達の中の二人、小暮幸恵こぐれさちえと乃際真美のぎわまみは今日はいない。理由はもちろん、単純にまだ委員会の仕事が終わっていないから。

大体、このスーパー小学生が異常なのだ。他を寄せ付けないほどに要領が良いとはいえ、委員会に所属する他の生徒達がまだ三割しか終わっていない仕事を、日直の仕事と並行してこなしていたにも関わらず、完璧に片付けたその手腕はもはや達人級。神業と言つてもいい。日頃の家事など全てをほぼ一人で担当していることもあるだろう。しかし、今日に限つてはそれだけではなかつた。

「ヤミさんと葵さんが来るんだから、腕に縫りを掛けて夕飯作らないと……！」　ヤミさんとは、料理を教える約束してゐるしね！」

彼女が仕事を早く終わらせることができた最大の要因。

それはヤミと優稀が今日、お泊まりしに來ることにあつた。

「そうだ！」　葵さんにどこで待ち合わせするか、聞いておかないと！」

彼女のテンションは普段の二、いや三倍といつたところか。スキップしそうなほど軽々とした足取りで、自宅へ向かつて歩く美柑はポケットから携帯を取り出し、

「あ、電源消したままだつた……」

画面が暗いままだつたそれの電源をつけて、再びポケットへと戻した。携帯は電源が

つしまでに少し時間がかかる。その間に少しでも家までの距離を縮めようと、美柑はやや小走り気味に、ダークブラウンの髪を揺らしながら、明るい笑顔で前へ前へと進んでいく。

ヤミには今日はお味噌汁の作り方を教えようとか、ヤミと優稀は仲良くなつてくれるだろうか、なつてくれるといいなとか、優稀は学校でどんな感じんだろうとか。そんなことを考えていたら、美柑の進むスピードはさらに上がつていた。本人は全くそれに気づいていないが。

やがて自宅までもう少しというところで、一度スピードを落とし、ポケットから電源がついただろ携帯を取り出す。慣れた様子で起動させると、画面には。

『ごめん美柑ちゃん、今日』

「ごめん、その一言は謝罪を意味する。そして、後半の『今日』だ。最悪の事態……とは言わないまでも、明らかに予想することができる、その続き。

「……まさか」

美柑は焦る様子で、設定しているパスワードを入力し、メールを確認する。そして全文を表示。

『ごめん美柑ちゃん、今日行けそうにない。ほんとごめん。理由は後で連絡す』
予想通りの続き。

しかし、不自然なところで文章が切れていた。

残り一文字を打ち忘れるような人ではない。余程急いでメールをうつたのか、それとも——何か事件に巻き込まれたのか。後で連絡する、とある以上、連絡してくれるとは思うがやはり心配だ。

そして分かることは、今日は優稀は来ない、ということ。

「……葵さんのバカ」

不貞腐れたように、そう呟いた。

わかってはいるのだ、仕方がないことくらい。そのくらい理解している。ただ理解してはいるが、納得はできない。

再度ポケットへと携帯を放り込み、進み出す。携帯を放り込む際、やや乱暴になってしまったのは仕方がないこと。

来れない理由はわからないが、今電話しても急ぎの用事なら出ることはできないし、メールをして邪魔になつても悪い。だから美柑は大人しく、連絡を待つことに決めた。同時に今日中に連絡がなかつたら、一週間くらい口を聞いてやらない、とも。

再び美柑は小走りで自宅へと向かう。

優稀は来なくとも、ヤミは来るのだ。どちらにしても、急いで準備をしよう、と。やはり美柑の進むスピードは上がる。

ただ、上がったはずのスピードは、メールを確認する前に比べると、明らかに半減していた。

ピンポーン、と。

よく言えば聞き慣れた、悪く言えば聞き飽きたほどに聞いたことのあるインターほんの音。綺麗で耳に入ると心地良いそれは、それぞれの家ごとに多少の違いがある。二回鳴つたり、ピンポンと伸びなかつたり、逆に長く伸びたり。本当に多種多様。それぞれ風情があり、どれも違つてどれもいい——なんて思うのは昔の詩人だけだ。

しかし、やはり一番良いのは自分の家のインターほんだろう。それこそ聞き慣れているので、耳に入りやすく、入つても違和感がない。……うん、やはり自宅が一番だ。

…………とまあ、ありきたりな結論に至つたが、インターほんについて語つたのは一種の現実逃避である。

「はーい！」

もちろん、目的地——どちら様かも知らない、ヤミの唯一の友達の家に連れて来られ

た優稀の、だ。

そんな彼など御構い無しにガチャツと、扉が開かれる。扉の前に位置取っていたヤミはその先にいる人物に向けて、普段はしないような優しい笑みを浮かべた。……口元が緩むだけの些細な変化ではあるが。

しかし、そんなヤミの友達のものだろう声に優稀は何故か聞き覚えがあつた。というか、つい昨日聞いた声だつた。

「ヤミさん、いらっしゃい！」

「ここにちは、美柑。今日はよろしくお願ひします」

そして、ヤミの発した相手の名前。——『美柑』。

声といい、名前といい、もう確定だつた。

「ヤミさん！ そちらの方がヤミさんの友達の……!?」

「はい、紹介しますね。私の友達のユウキです」

つい先日、聞いた紹介の仕方と似たようなそれに、僅かながら苦笑する——余裕は優稀にはなかつた。なぜなら目の前にいる少女が、先程ドタキヤンを食らわせたばかりの女子小学生だつたから。目の前の相手も予想できていなかつたのか、目を見開き、あんぐりと口を開いている。

——どうやら、世間は狭かつたらしい。

二人が声を上げたのは同時だつた。

「あ、葵さん!?」

「美柑ちゃん!?」

驚愕の声。

それを発したのは、約束が破綻したはずの二人。美柑にとつては買い物仲間で仲の良い、お兄さん兼友達。優稀にとつては買い物仲間で仲の良い、妹的存在兼友達。その二人が偶然、約束の日、約束通りにその場所に居合わせた。二人の時間が止まる——。

「?」

唯一動いていたのは、この状況を作り出した張本人。

優稀と美柑の約束を破綻させ、守らせた金髪の少女。

ヤミは驚きの表情で固まる二人を他所に、その小さな口をへの字に曲げ、その細い首を可愛らしく傾げ、理解できないとばかりに、頭の上にはてなが浮かんでいるのがわかるような、そんな不思議そうな雰囲気で、ただただ二人の間に佇んでいた。

第六話 『多分偶然』

「……それじゃあヤミさん、早速始めよっか」

はい、と。

ヤミはそう返事をし、エプロンをつけた美柑に先導され台所へと向かう。

結城家に着いて間も無く、驚きを隠せない優稀と美柑だったが、時刻はすでに夕方。それは夕飯の準備に取り掛かる時間を意味している。なのでとりあえず、といった様子で美柑が、ヤミを連れて台所へと消えていった。しかしあり、美柑もヤミと優稀がどういう関係か気になるようで、チラチラと優稀とヤミを交互に見やつていたのは言うまでもない。おそらく夕飯の席に着いたら、その話題がまず最初に挙がるだろうことは、ほとんど確実と言える。

そんな衝撃的な出来事があつた直後。

その出来事の中心人物たる葵 優稀はといえば、台所へと向かう二人の後ろ姿を呆然と眺め、予想外の驚きに固まるわけでもなく、また初めて来る家を興味深そうにマジマジと見るわけでもなく、はたまた自分の友達二人がお互いを知らない仲ではなかつたことに喜ぶわけでもなく、

「まうー！」

「……え、何で？」

——頭上に花の生えた幼女に懐かれていた。

具体的にはリビングに入った途端、手を引かれ、胡座をかくように座られ、その上に陣取られたとも言う。そして、何故か右手にはゲーム機。今来たばかりの客人に、突然ゲームをやれと言うのか。何とまあ、破天荒な行動だろうか。……子供に言つても仕方ないが。

「まうまう！」

「ん?……やれ、つてことか？」

ブンブン、と効果音が出ていそうなほど首を縦に振るその幼女は満面の笑みを浮かべながら、前に投げ出した足をバタつかせ、もう一度「まうー」と鳴いた。そんな彼女を見て「はいはい」と優稀も仕方ないとばかりにゲーム機を起動させ、名も知らない幼女のためにゲームを始める。意外と世話好きである彼にしてみれば、その程度のことなら苦にならない。……もちろん、それが苦手な相手であれば、話は別だが。具体的には青紫色の髪の隣人とか、ピンク髪腹黒王女殿下とか。

そんな彼の行動に目の前の幼女のエメラルドグリーンの長髪がまるで犬の尻尾のように跳ねた気がした。

ゲームを始めて見ると、それは普通のロールプレイングゲームだつた。しかもこれが意外と面白い。全20のステージをクリスタルを集めながらクリアしていくもので、ストーリー性もあり、ついつい熱中してしまったタイプのゲーム。優稀も仕方なくやらされているということを忘れ、熱中してしまつていて。……ただ一つ、問題なのは初心者でも攻略しやすいようにできているが、それはあくまで途中までの話だということか。ステージ1から15まではサクサクと問題なくクリアすることができる。……しかし、16からは途端に難度が上がり、攻略が難しくなつていく。それはもう上級者でも難しいと感じるほどに。というのも、ステージ16から出てくるアイテムが鬼畜過ぎるのだ。何だ。使つたらゴール一歩前までワープできる代わりに装備全解除の腕輪つて。そのゴール一歩前にステージボスが現れるのに、装備なしとかありえない。ちなみに装備なし状態とはインナーと武器のみの状態だ。もちろん、防御力などゼロに決まつていい。とまあ、そんな感じのアイテムがゴロゴロとトラップのように地面にばら撒かれていたのだ。初見でクリアはまず無理。

よし、終わつたー！

「幾何學？」

……とは言つたが、初見クリアした者がここに一名。もちろん、優稀だ。足の上の幼女も「す、すごいっ!?」みたいな感じで目を見開いている。彼は意外とゲームが得意だつ

たりするのだ。

「よーし、満足か？　ちびっ子」

「まうー！」

バンザーイ、と両腕を頭上に伸ばす幼女の頭を撫で、優稀は満足げに息を吐いた。ゲームをクリアすると言い知れぬ達成感に包まれる。それは突然やらされたものでもやはり変わらないようだ。

「おー、セリーヌご機嫌だナ！」

そこへ突然の声。

優稀は事前に、美柑から彼女の兄と居候がいると聞かされていたので、別に驚くことはないはずだった。所詮は初めて会う相手。当たり障りのない挨拶を交わして、『美柑ちゃんの友達です。遊びに来ました』と軽く理由を話すだけでいい。友達の家に遊びに来た時など、大抵そのくらいのものだ。……しかし。

リビングへと、ドアをやや荒々しく開けて入つて來た人物。その相手が見知った相手ならば、それは当てはまらない。

「はあ！？　……何で？」

だから、優稀がこのように声を上げて驚いてしまつても仕方がないことだつた。さて、この状況でそんな風に堂々と入室してきたその人物とは。

つい最近、彩南高校にやつて来た転入生の片割れ。優稀と友達になつた方。ピンク髪ツインテールでお馴染みのナナ・アスター・デビルークだつた。

「——ユウキか!? オマエ、何でここに!？」

初めて会つた時とは違い、頭の後ろで一つに纏めたピンク髪を激しく揺らし、棒付きの飴を舐めながら、その存在を確かめるようにグイッと前のめりになつたナナが優稀と同じようにやや荒々しく、驚愕の声を上げた。

「——ということは、美柑ちゃんの家に住みついた居候達つていうのはデビルーク星のお姫様達だつたつてことか」

驚愕の事実。

ある程度の事情をナナに聞いた優稀は、頭を抑えたくなる気分で一杯になつた。そりやあ学校が一緒になるわけだ。いつも買い物が一緒になる友達の家に住んでいるなら、学校も一緒になる可能性が高いから。ただそうなつてくると、ナナではない方の双子の片割れも今同じ家の中にはいるわけだ……。

「ああ、そうだぞ！　それにしてもユウキはミカンとヤミと友達だつたのか！」

元気よく、特徴的な八重歯をチラつかせながら笑うナナ。

しかし違う。今はそこじやない。優稀は表面上では肯定的な返事をしながら、今考えるべきことへと思考を巡らす。

議題は『腹黒王女の対処法』。

彼女は何故か口や態度では優稀のことを「嫌い」と明言しているのに、友好的な関係を築くように迫つてくる。嫌といいながら、それとは逆の行動をとる……最近、二年の先輩がよく口にする『ツンデレ』と言うやつだろうか。

——いや、奴の場合はそうではないような気がする。

何というか、目的のために本当に仕方なく……という感じだ。本人もそれっぽいことを言つていたし。というか、口を滑らせたのかどうかはわからないが、『リトさんのために』って言つていた。……ん？

「——リト？」

リト。結城リト。……結城。

その名字は、優稀を家に呼んだ張本人である美柑の名字と同じ。そして、彼女には兄がいる。

「……いやいや、まさかな」

「ん？ どうかしたのか？」

顔を覗き込むようにして、心配してくるナナに「大丈夫だ、問題ない」と返答し、頭に浮かんだ考えを振り払うように頭を横に振る。しかし、無くはない話だ。結城美柑の家に住み着く居候の腹黒王女。その腹黒王女が慕う結城リト。……何か嫌な予感が。「あれ、そういうえば」

——春菜さんの好きな人の名字も、『結城』だつたような……。

確か「名字は、優稀君の名前と同じ読みだよ」と恥ずかしそうに言っていた。意外と驚いたので、鮮明に記憶に残っている。間違いないはずだ。そして、結城リトは春菜と同学年……はあ。

「……いや。いやいやいやいや……ま、まさか、なあ？ は、ははは……」

「お、おい、ホントに大丈夫か？」

ナナは目の前で胡座をかいて座つて、あたふたと両腕を彷徨わせている。しかし、優稀はそれに反応する余裕はなかった。もし、今の推測が正しいなら、これからモモと関わる頻度が確実に増えるからだ。いわば、朝から夜までずっと秋穂に絡まれているのと同じような状態になるということ。朝、昼は秋穂モドキのモモに絡まれ、夜は本体が奇襲を仕掛けてくる。……朝、学校に行く前もか。

そんなこと優稀に耐えることができるだろうか。いや、耐えることなどできはしな

い。

「うん無理。絶対無理」

「……ホントのホントに大丈夫なのか!?」

今度は真顔でそう言いだした優稀に、ナナはとうとう病院の電話番号を美柑に聞こうかと考え始めていた。備え付けの電話の近くに立ち、受話器を逆に持つていてるあたり、どれだけ本気でさらに慌てているかがよく伺える。

すでに議題である『腹黒王女の対処法』などとは、全く別のことを考えてしまつていてるが、本人はその議題すらも忘れてしまつていてるのでもはや手遅れだ。

「……よし、旅に出よう」

「なあ、ミカン!? 病院の電話番号、何番だっけ!」

とうとうナナが耐えきれずに、台所に消えていった。完全に思考を放棄した優稀は、足の上にいるセリーヌの頭を撫でながら、淹れてもらつたお茶を飲んで、ほうと息を吐いた。その様は全てを諦めた老人の様だったというのは、その時の彼を見た美柑の感想である。

そんな感じで前途多難な優稀のお泊まりは始まつたのだった。……もちろん、病院に電話しようとしたナナはその前に復活した優稀に止められた。